

現代中学生の意識分析：「生徒化」論の可能性

著者	富田 英典, 岩見 和彦
雑誌名	関西大学社会学部紀要
巻	14
号	1
ページ	49-97
発行年	1982-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10112/2037

現代中学生の意識分析

——「生徒化」論の可能性——

岩 見 和 彦
富 田 英 典

序	IV 「生徒化」過程とその構造
I 中学生の自己像	1 子どもの「生徒化」
II 友人と仲間関係意識	2 「忘学」規制と「生徒化」
III 学校観の諸相	3 「ツッパリ」志向の論理

序

何で学校へ行くのでしょうか／何で校則があるのでしょうか／何で先生と生徒があるのでしょうか
そこにいるあなた／そう思ったことはありませんか／そのあなたも……／私はフツと思う
ことがあります／あなたが普通の子なら／私と同じ普通の子なら／考えたことはありませんか／
学校へ行って勉強して／いい高校へ行くためでしょうか／何で校則があるのですか／良い子で
いるためでしょうか／だったら良い子になれない子は悪い子でしょうか／先生と生徒／大人と
子でも同じ人間じゃないですか／同じくこの世に生まれて来たのに／先生はいばって生徒は小
さくなっている／なぜなのでしょうか

春夏秋冬／季節はいつも回っています／それと同じようにそれでいいんだ／そう思ってませ
んか／春夏秋冬どうして季節は回って来るのだらう／なぜだらう／そう思いませんか

あの顔この顔あの人この人／みんな私と同じ中学生なら／考えてみてください

(中学1年 女子)¹⁾

普通の子が、今学校とは何か、教師と生徒とは何か、を問うように、普通の大人もこの問題を
問わなくてはならない。価値の「過」制度化²⁾を自明のものとみることに慣らされたわれわれ
は、今、大きな試練を受けようとしている。「教育」の中身が問われ、担い手(親や教師や行政

1) 『教育情況』創刊号(批評社, 1982) p. 102より引用。

2) I・イリッチ, 東洋・小澤周三訳『脱学校の社会』(東京創元社, 1978)による。

者)の姿勢が問われ、そして学校という存在そのものが問われ出している。

本稿は、「吹田市における中学生の意識調査」(昭和56年10月実施)をデータとした分析結果の一部をまとめたものである³⁾。単に結果の記述に終わらせないために、この問いかけに対するわれわれなりの回答(の仮説)を、そこに重ねあわせる試みをしている。調査と理論の結合という点では、かなり粗雑で強引な論述が多いかもしれないが、現在必要なのは、沈黙考よりパラダイムの積極的な提示だと考えている。

全体の構成は、中学生自身の自己像、友人・仲間関係、学校生活の諸相を類型化によって描き出し、彼らの「問いかけ」がどのような事情のもとで出されているのかを探る。そして最後に、「生徒化」論という視点から中学生たちの問題状況を意味づけ、学校論の基礎的考察をする、という展開である。

I 中学生の自己像

子どもは、親の鏡だと言われる。同時に、社会の鏡でもあるとするならば、「荒れる中学生」は、家庭と彼らを取り巻く社会の荒廃を意味している。しかし、最近とみにクローズアップされてきている中学校の荒廃は、そのような簡単な等式では解けない。歪んだ社会と荒れる中学生の間に何か得体の知れないものが存在している。その正体に気付く者は少ない。なぜなら、それはあまりに身近にいて、疑うことすらなかったからである。われわれは、中学生の全体像を描きながらこの正体を明らかにしていきたい。

まず、ここでは中学生のセルフ・イメージを取り上げながら、中学校生活の一面に光を当てることにする。

セルフ・イメージとして、次の21の項目を設定した。「特技」「教科の好き嫌い」「チャレンジ精神」「自分勝手」「正義感」「規律遵守」「目だつ存在」「劣等感」「家の中と外での態度」「家族観」「親孝行」「学校の中と外での態度」「学力と能力」「教師の期待」「努力志向」「受働性」「社交性」「アイデンティティ」「スター志向」「ツッパリ志向」「おとな願望」。

何か自分に得意なものを持っている子は、65.1%で学年差、男女差はみられず平均している。39.8%の者は「努力とか我慢という言葉が好きだ」と答えており、48.8%の者が「誰とでも仲良しになれる性格だと思う」と答えている。その反面、不安な中学生像も顔をのぞかせる。たとえば、まわりの影響を受けやすい子は2人に1人、ときどき自分がわからなくなる子が3人に1人である。この傾向は、とくに女子に強く、3年女子では各々3人に2人、2人に1人と増える。

3) 関西大学社会学部社会調査室「吹田市における中学生の生活と意識」(1982)を参照。吹田市公立中学校342学級のうち30学級を無作為に抽出、回収学級数28、回答者数1,122名。

なお本調査は多数の先行調査を参考にして企画立案された。代表的なものとして、東京都都民生活局「大都市における児童・生徒の生活・価値観に関する調査」(1978)がある。

受験戦争がいっこうにおさまらない中で、自己の評価をテストの結果に依拠している子が多い。たとえば、テストの点数よりも自分は賢いと思う子はわずかに10人に1人、思わない子はじつに10人に6人で半数を越えている。この傾向もとくに女子に強い。劣等感を持つ子も少なくなく、平均で45.1%で学年が上がるにつれて増えていく。3年女子では、59.2%にまで達する。

規律をよく守る子は平均3人に1人、なかでも2年女子は4人に1人で最低である。それに対して、ツッパリたい子は平均4人に1人、最高は2年女子で3人に1人となり、規律をよく守る子を上まわっている。

年齢的に考えても非常に不安定な時期であり、そのうえ高校受験の影響により、現代の中学生像はかなり複雑なものとなっているように思われる。そこで次に数量化Ⅲ類により中学生の自己像を描き出してみたい。

数量化Ⅲ類による処理の結果、意味ある3つの軸が析出された。Ⅰ軸の相関係数は0.3309、Ⅱ軸の相関係数は0.3130、Ⅲ軸の相関係数は0.2546であった。（なお、「どちらともいえない」と「NA」は、「思わない」にに入れて処理した。）

まず、Ⅰ軸の検討から始めよう。Ⅰ軸上に占める各アイテム・カテゴリーのウエイトでマイナスの絶対値の大きい項目は、「家族のつながりがうとうしいと思う気持が強い」「クラスの中でわりと目だつ存在だと思う」「自分はツッパってみたいと思うことがよくある」「家の中と外では態度や行動がちがっている」「ときどき自分という人間がわからなくなる」「自分勝手なところが多い」「はやく大人になりたい」などである。家庭生活の中で自分の位置を次第に自覚していき、親の自分に対する愛情を素直に受け入れ、それを今度は親やまわりの人へ向けていくのではなく、むしろ逆に家族のつながりをうとうしく感じる。自分の我を通そうとする傾向があり、まだ十分に自我が確立していないようにみうけられる。

Ⅰ軸のプラスの側で大きい項目は、「まわりの友達の考えや行動に影響されない」「家の中と外では態度や行動がかわらない」「自分という人間がわからなくなることはない」「好きな教科と嫌いな教科の区別はない」「間違ったことや失敗をゆるさない気持が強い」「はやく大人になりたいと思わない」「自分勝手なところが多いとは思わない」などである。セルフ・コントロールの強さを示す項目である。

したがって、Ⅰ軸は〈わがまま—強いセルフ・コントロール〉の尺度とすることができる。

次に、Ⅱ軸に関するアイテム・カテゴリーのマイナスの絶対値の大きな項目は、「学校の先生からはよく思われている」「クラスの中でわりと目だつ存在だと思う」「新しいことや、こわいことに進んで挑戦するほうだ」「自分は親孝行のほうだと思う」「まちがったことや失敗を許さない気持が強い」「テストの成績よりも自分は頭がいいと思う」「『努力』や『がまん』という言葉が好きだ」「だれとでも仲良しになれる性格だと思う」などである。明かるく活発で、クラスの人気者といった生徒の姿があらわれている。

これに対してプラスの項目は、「スポーツや音楽など自分の得意なものは別にない」「だれとで

表1 カテゴリー - ウェイト表

アイテム・カテゴリー	実数	I 軸	II 軸	III 軸
スポーツや音楽など自分には得意なものがある				
1. 思う	730	0.14090	-1.17181	-0.18878
2. 思わない	392	-0.26208	2.18539 ①	0.35200
好きな教科ときらいな教科がわりとはっきりしている				
3. 思う	740	-0.51427	0.10682	0.00958
4. 思わない	382	0.99663 ④	-0.20576	-0.01816
新しいことや、こわいことに進んで挑戦する方だ				
5. 思う	332	-0.33154	-2.62158 (3)	-1.23413 (5)
6. 思わない	790	0.13946	1.10218 ④	0.51882
自分勝手なところが多い				
7. 思う	366	-1.85368 (6)	0.29274	0.47594
8. 思わない	756	0.89751 ⑦	-0.14111	-0.23017
まちがったことや失敗を許さない気持が強い				
9. 思う	311	-0.54552	-2.22256 (5)	1.83709 ⑤
10. 思わない	811	0.20930	0.85276 ⑤	-0.70420
規律やルールをよく守るほうだ				
11. 思う	355	0.96785 ⑤	-1.36485	3.34408 ①
12. 思わない	767	-0.44778	0.63223	-1.54747 (4)
クラスの中でわりと目だつ存在だと思ふ				
13. 思う	231	-1.37362 (2)	-3.18353 (2)	-3.08705 (1)
14. 思わない	891	0.35616	0.82572 ⑥	0.80052
他の人より自分はおとっていると思うことがたびたびある				
15. 思う	506	-0.95229	0.13149	1.35279
16. 思わない	616	0.78248	-0.10721	-1.11100 (6)
家の中と外で態度や行動がちがっている				
17. 思う	410	-2.12876 (4)	0.51120	1.37189 ⑦
18. 思わない	712	1.22596 ②	-0.29369	-0.78973
家族のつながりがうっとおしいと思う気持が強い				
19. 思う	187	-3.36930 (1)	0.11518	-0.55382
20. 思わない	935	0.67384	-0.02262	0.11100
自分は親孝行のほうだと思ふ				
21. 思う	239	0.26489	-2.61383 (4)	1.84277 ④
22. 思わない	883	-0.07162	0.70787 ⑦	-0.49851
学校の中と外では態度や行動がちがっている				
23. 思う	239	-3.07049	0.08261	1.14261
24. 思わない	883	0.83108	-0.02190	-0.30900
テストの成績よりも自分は頭がいい				
25. 思う	131	-1.67656	-1.92111 (6)	2.15502 ③
26. 思わない	991	0.22161	0.25429	-0.28461
学校の先生からよく思われている				
27. 思う	103	-0.83155	-4.06425 (1)	3.21742 ②
28. 思わない	1019	0.08404	0.41112	-0.32496
「努力」や「がまん」という言葉が好きだ				
29. 思う	447	0.58019	-1.89869 (7)	0.73379

アイテム・カテゴリー	実数	I 軸	II 軸	III 軸
30. 思わない まわりの友だちの考えや行動に影響されやすい	675	-0.38396	1.25800 ③	-0.48572
31. 思う	636	-1.00969	0.25580	-0.08905
32. 思わない だれとでも仲良しになれる性格だと思う	486	1.32172 ①	-0.33377 ②	0.11677
33. 思う	548	0.22204	-1.80097	-1.02102 (7)
34. 思わない ときどき自分という人間がわからなくなる	574	-0.21168	1.72022	0.97496
35. 思う	404	-2.02258 (5)	0.16738	1.59711 ⑥
36. 思わない スターやタレントをあこがれる気持が強い	718	1.13817 ③	-0.09352	-0.89838
37. 思う	431	-1.20754	-0.31947	-0.29733
38. 思わない 自分はツッパってみたいと思うことがよくある	691	0.75336	0.19994	0.18566
39. 思う	263	-2.92767 (3)	-0.74024	-2.22860 (2)
40. 思わない はやくおとなになりたいと思っている	859	0.89638	0.22709	0.68252
41. 思う	378	-1.79022 (7)	-0.45722	-1.59502 (3)
42. 思わない	744	0.90726 ⑥	0.22102	0.80543
相 関 係 数		0.33092	0.31303	0.25460

※ ○の中の数字はプラスの側の1位から7位

()の中の数字はマイナスの側の1位から7位

も仲良しになれる性格ではない」「『努力』や『がまん』という言葉がすきではない」「新しいことやこわいことに進んで挑戦するほうではない」「まちがったことや失敗を許さない気持は、そんなに強くない」「クラスの中で目だった存在ではない」などである。「おとなしく」「内気」な傾向がみられる。

したがって、II軸は<消極—積極>を分ける尺度であるといえよう。

III軸に関するアイテムカテゴリーでマイナスの絶対値の大きな項目は、「クラスの中でわりと目立つ存在だと思う」「自分はツッパってみたいと思うことがよくある」「はやく大人になりたいと思う」「規律やルールをあまり守るほうではない」「新しいことやこわいことに進んで挑戦する方だ」「他の人より劣っているとは思わない」などである。反抗的な傾向が見られる。

これに対して、プラスの項目は、「規律やルールをよく守るほうだ」「学校の先生からはよく思われている」「テストの成績よりも自分は頭がいいと思う」「自分は親孝行のほうだと思う」「まちがったことや失敗を許さない気持が強い」「ときどき自分という人間がわからなくなる」「家の中と外で態度がちがっている」などである。規範に順応している傾向を示している。

したがって、III軸は<反抗—従順>を分ける尺度である。

数量化III類による処理によって<わがまま—強いセルフ・コントロール>と<消極—積極>と

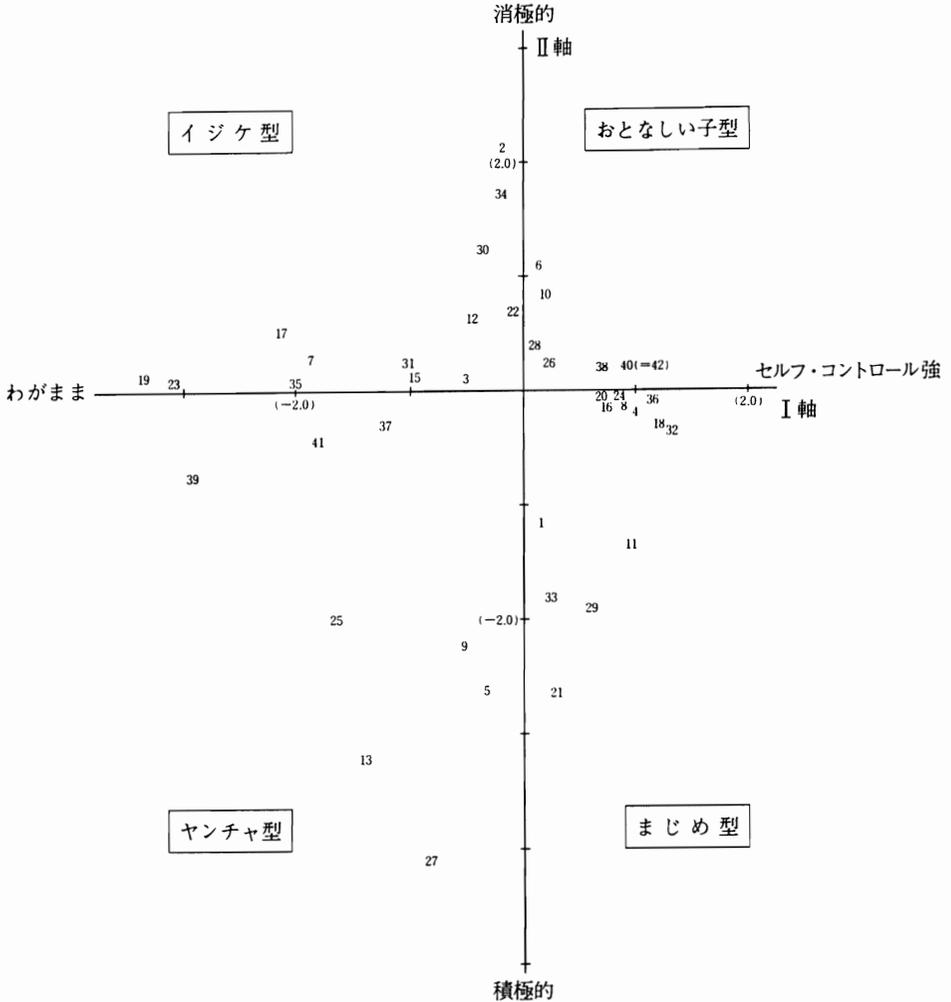


図1 中学生のセルフ・イメージ類型

<反抗—従順>の3つの尺度を析出した。これらを組み合わせることによって、類型化を試みることができる。

まず、I軸とII軸の交叉だけによってできる4つのタイプについて考えたい。

第1象限は、セルフ・コントロールが強くわがままでないが、積極性もないタイプである。チャレンジ精神がなく、間違ったことや失敗を許さない気持ちも弱く、クラスの中ではとくに目だつほうではなく、スターやタレントに憧れることもなく、ツッパってみたいと思ったり、早く大人になりたいと思ってもないような生徒である。これを「おとなしい子」型と呼んでおこう。

第2象限は、わがままで消極的なタイプである。同様に具体的に示せば、自分勝手なところがあり、家の中と外で態度が変わり、家族がうっとうしいと感じ、努力や我慢という言葉を好ま

ず、誰とでも仲良くできるというわけでもない。しかも、時々自分という人間がわからなくなるような生徒である。これを「イジケ」型と名づける。

第3象限は、わがままではあるが積極性のあるタイプである。具体的には、何ごとにも進んで挑戦するほうであり、正義感があり、クラスの中では目立つ存在で、先生からはよく思われており、スターやタレントに憧れ、テストの成績よりも自分は頭がいいと思っている。しかも、ツッパリたいと思ったり、早く大人になりたいと思っているような生徒である。これを「ヤンチャ」型と呼んでおこう。

第4象限は、セルフ・コントロールが強く、積極性を示すタイプである。自分の得意なものを持ち、教科の好き嫌いもなく、規則をよく守り、劣等感はなく、家の中と外で態度が変わるようなこともなく、親孝行で、努力や我慢という言葉を好み、他人に影響されることもなく、誰とでも仲良くでき、自分がわからなくなることもないような生徒である。これを「まじめ」型と呼んでおこう。

こうして現代の中学生の自己像には、「おとなしい子」型、「イジケ」型、「ヤンチャ」型、「まじめ」型の4つの類型があることがわかる。

小学3年、5年、中学2年を対象にした「第一回東京都子ども基本調査」⁴⁾は、児童、生徒を4つのタイプに分類し、オットリ型、イジケ型、ヤンチャ型、イイコ型を折出しており、今回の分析結果とかなり重なり合う。上記の調査では、男子はイイコ型からイジケ型へ、女子はオットリ型からイジケ型へと、共にイジケ型へ移行している。ところが、昨年6月末から2週間にわたって行われた「青少年と暴力に関する研究調査」（総理府）では、「反抗的な女生徒」像が指摘されている⁵⁾。今回の吹田の調査でも、男女差が目をひいた。したがって、この問題にアプローチできる類型化が必要である。さらに、単なる類型論に終わらせず、各類型の関係を検討することによって学校生活の内部に一步足を踏み込んだ分析が必要であると思われる。

そこで、これらの問題を検討するために、さらにⅢ軸を取り上げる。

Ⅲ軸を交叉させると「従順的」か「反抗的」かによって、8類型を描くことができる。つまり、「従順的・おとなしい子」型、「反抗的・おとなしい子」型、「従順的・イジケ」型、「反抗的・イジケ」型、「従順的・ヤンチャ」型、「反抗的・ヤンチャ」型、「従順的・まじめ」型、「反抗的・まじめ」型となる。

諸属性と学校生活に関するいくつかの項目で、サンプル・スコアの平均値を各軸上にプロットしてみると図2～4のようになる。これらをもとにして、各タイプのプロフィールをよりはっきりとさせ、さらにその問題点をもあわせて考察しておこう。

まず、「従順的・おとなしい子」型とは、セルフ・コントロールは強いが消極的で、とくに、目立たずチャレンジ精神の少ないタイプである。仲間集団は、活発でなく、一番の親友と異性の

4) 東京都都民生活局、前掲書参照。

5) 朝日新聞、1982.7.19

話をしたり、悩みを打ち明けたりすることのない子である。もし中学校が義務教育でなくなっても勉強しておかないと困るから学校へ行く。全員によくわかる授業をしてくれる先生がいい。油断をすると「落ちこぼれ」てしまうという子がこのタイプである。このタイプは、自分の考えを主張することが少ない。それはおそらく主張すべき自分の考え自体を持っていないからであろう。楽天的で悠々自適の生活をしているようにもみえなくもないが、どちらかという体制埋没的かつつまらない学校生活を送っているタイプであろう。

次に「反抗的・おとなしい子」型とは、セルフ・コントロールは強いが消極的で、とくに正義感の弱いタイプである。「金八先生、熱中先生」は、現実にはいないが理想的な先生だという子、またヘアー・スタイルの規制や制服の着用についても、ある程度やむをえないという子である。このタイプには、ややさめた部分があり、世間からおおきく逸脱することはないが、正義感が弱く代表されるように、自らの信念をもったり夢をもとめたりすることはないようだ。

「従順的・イジケ」型は、わがままで消極的で、とくに学校や家の中と外で態度が変わり、時々自分がわからなくなるタイプである。朝、家を出る時に「先生に当てられて恥をかかないかなあ」と心配だが、もし中学校が義務教育でなくなっても、何となく不安だから学校へ行く子である。3年生の女子にこのタイプが多い。また仲間集団のない子にも多く、どうも学校生活をあまり楽しんでいるようには思えない。むしろ、しかたなく行っているようである。「金八、熱中先生」は、「かっこよすぎて嫌い」「しょせん作り話だ」という子、「落ちこぼれ」の原因は学校にあるという子である。これらの点から考えて、学校生活にはあまり期待をかけておらず、その場で態度をうまく使いわけのだが、時々自分という人間がわからなくなるタイプのようである。

「反抗的・イジケ」型は、わがままで消極的で、とくに家族がうっとうしく、規律やルールをあまり守らないタイプである。クラブに所属していない子、女子の一人っ子の多くがこのタイプであり、集団生活に十分適応しているとは言い難い。たとえば、タバコやシンナーの禁止に消極的な子、対教師暴力を肯定する子がこのタイプなのである。とうぜん登校気分も爽快とはいえない。また「落ちこぼれ」ていると思っている子も多く、かなり問題を孕んだタイプであるといえよう。

「従順的・ヤンチャ」型は、わがままで積極的で、とくに先生によく思われており、自分はテストの成績よりも賢い、正義感のあるタイプである。兄弟構成も、長子や末子ではないまん中の男子に多い。明るく少々オッチョコチョイなところもあるが、クラスの人気者といった感じがある。

「反抗的・ヤンチャ」型は、わがままで積極的で、とくに目立ちたい、ツッパリたい、はやく大人になりたいタイプである。兄弟構成は、まん中の女子と欠損家族の子にも多い。「落ちこぼれ」は親の放任のせいだという子で、家庭内に何か問題をもっている可能性も暗示している。さらに、タバコやシンナーの禁止についての校則などない方がいいと主張する。仲間集団もリーダー

現代中学生の意識分析 (岩見・富田)

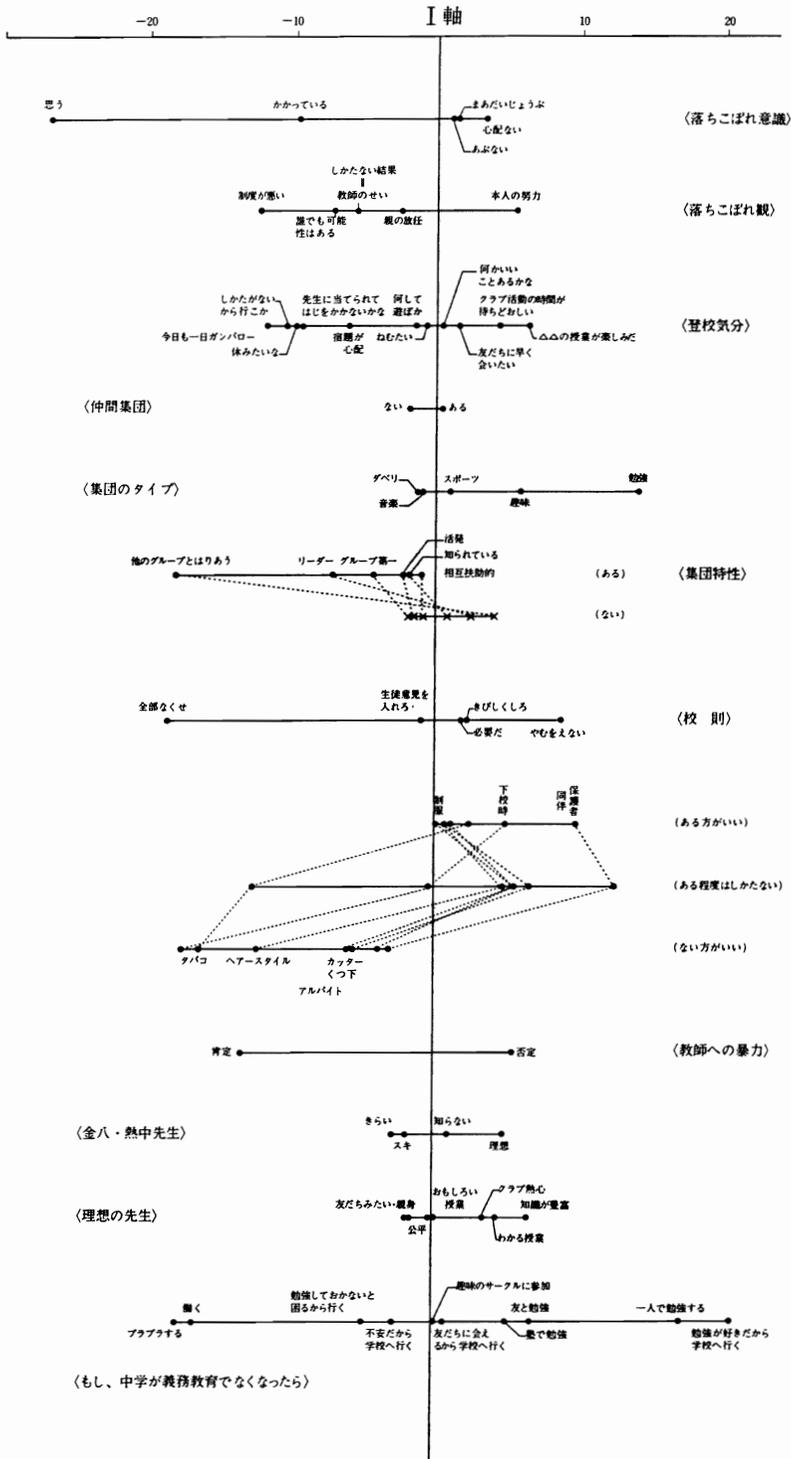


図2 I軸—セルフ・イメージと関連項目

一がいて、グループのことを第一に考え、他のグループと張り合うこともあるという子がそうで、かなり問題を起こしそうな「ガキ大将」的なタイプであろう。

「従順的・まじめ」型は、セルフ・コントロールが強く積極的で、とくに規律やルールをよく守り、親孝行で努力や我慢という言葉が好きなタイプである。校則についても、保護者同伴、カッターや靴下の指定、ヘアスタイルの規制など、中学校でしか通用しない規則で、最近むしろ不満が高いものについても「ある方がいい」という子である。朝、「今日も一日がんばろう」「△△の授業が楽しみだ」「クラブ活動の時間が楽しみだ」と思いながら家を出る子、「勉強中心」の仲間集団を持ち、もし中学校が義務教育ではなくなっても、なんらかの形で勉強を続ける子である。まさに優等生タイプと言えよう。

最後に、「反抗的・まじめ」型は、セルフ・コントロールが強く積極的で、しかも誰とでも仲良くなれ、何か自分に得意なものがあるタイプである。1年生男子、一人っ子の男子には、このタイプが多い。「落ちこぼれ」意識もあまりなく、それは本人の努力次第だと考える子、「スポーツ中心」の仲間集団をもつ子であり、どこか爽やかな感じのするリーダー・タイプであろう。

全体として、男子は「反抗的・まじめ」型から「従順的・ヤンチャ」型に向かっている。それに対して、女子は「反抗的・おとなしい子」型から「従順的・イジケ」型へと移行している。2年男子と3年女子については、「積極性」への移行がみられるが、全体的にはI軸に沿いながら

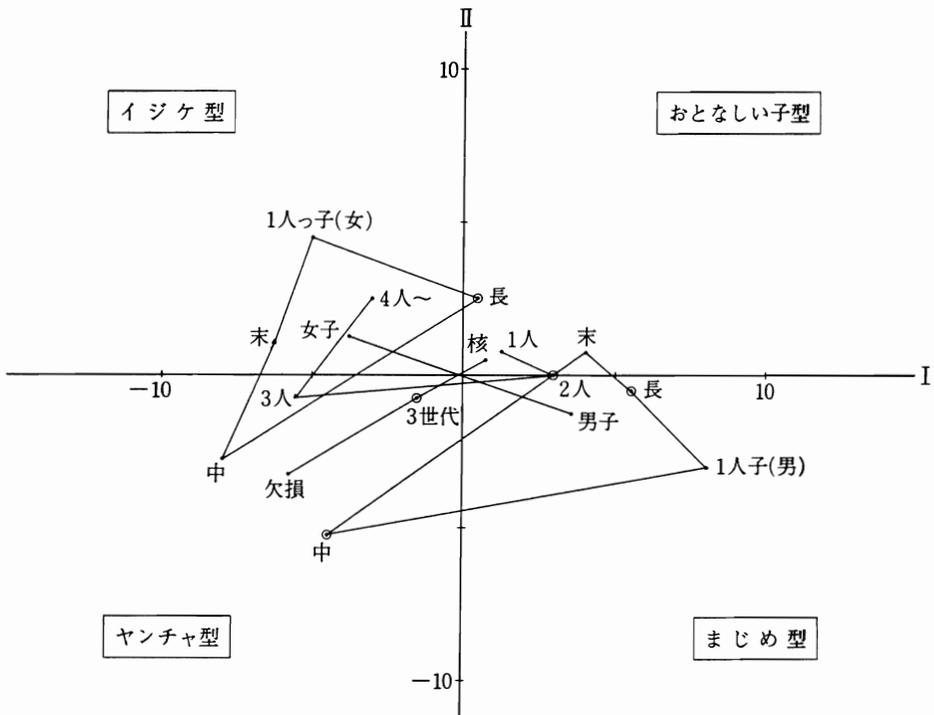


図5 セルフ・イメージと関連項目（一般属性）

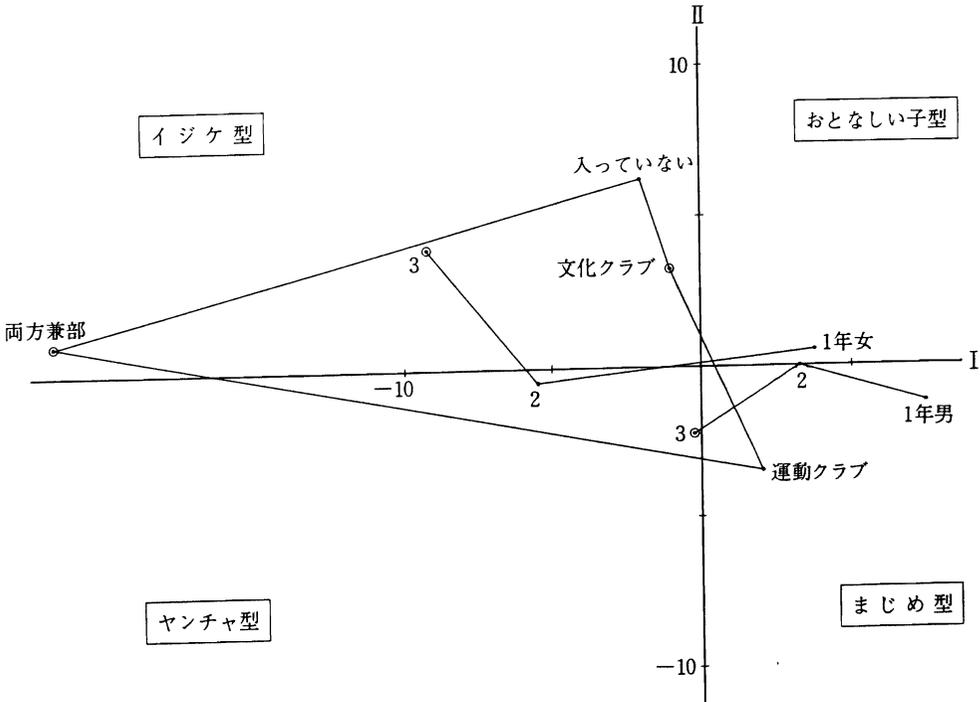


図6 セルフ・イメージと関連項目（校内属性）

「わがまま」の方向へ変化している。つまり、「従順的」への移行は、「わがまま」な傾向の増加と平行しているのである。学校生活へ順応していくその過程に、何か大きな問題が潜んでいるのではないかと思わせられる。

学校生活が、いくつかのセルフ・イメージの子のグループによって構成されている世界だととらえるならば、学校を舞台にして演じられる劇の配役という視点から、この8類型を再構成することができよう。それは、たぶん第3章で論じられる内容を補完する意味をもつにちがいない。そこで「荒れる中学校」という劇の各配役のキャラクター構成にアプローチしてみたい。

基本的には、4つのタイプの配役群を考えることができる。

第一群は、「従順的・まじめ型」と「従順的・おとなしい子」型によって構成される。いわゆる優等生タイプと体制埋没型である。彼らは、学校によってその存在証明を与えられており、換言すれば「向学校文化」的な生徒群であるといえよう。

第二群は、「反抗的・ヤンチャ」型と「反抗的・イジケ」型によって構成される。目立ちたい、ツッパリたいタイプと、義務教育でなくなったら働く、ブラブラするというタイプである。どちらかと言えば、学校によって名誉感情を傷つけられたり、学校生活に魅力を失っている者である。「反学校文化」的ともいえよう。

第三群は、「従順的・イジケ」型と「反抗的・おとなしい子」型によって構成される。前者は、

その場その場でうまく態度を変えるが、時折自分を見失うタイプで、後者は、正義感にとほしいが、問題を起こすほどの積極性もないタイプである。不満を何かにつけるような表立った行動に出ることは少なく、むしろ、結果的に反学校的な第二群を背後で支えるような雰囲気を作り出していると考えられる。

第四群は、「従順的・ヤンチャ」型と「反抗的・まじめ」型によって構成される。前者は、積極的で先生にもよく思われており、少々チャメツケのあるクラスの人気者タイプである。後者は、セルフ・コントロールが強く、積極的で中学校の現状にけっして盲従することなく、むしろ反抗的で、しかも誰とでも仲良くなれ、何か自分の得意なものを持っているタイプである。この配役群は、いわゆる「勉強ぎらいの学校ずき」といった傾向の強い子の集合であるといえる。その学校が多くの子どもにとって楽しい場所であるかどうかは、この配役群の割合によって判断できよう。

第一群と第二群の関係は、受験生志向とツッパリ志向の対比にある程度一致する。これまで中学生を論じる時の視座の中心は、この関係に置かれていたといえよう。しかし、第二群が第一群の裏返しでしかない以上、両者は共に学校の存在そのものの囚われの身であることにはかわりはない。つまり、同位対立物でしかないのである。

しかも、前述したようにこの関係が、第三群によって強力に支えられているとするなら、この関係にメスを入れるのが第四群であろう。第三群との対立関係の中で、第四群が主流を占めていくことが、ひいては第一、第二群の対立を内側から解消していくことにつながるのではないか。

学校生活の中で生徒達は成長していく。しかし、学校生活は個々の生徒の日常生活なしには成立しえない。したがって、現在の中学校に中学生自身が新しい息吹き込む余地は残されているはずであり、その担い手はおそらく「従順的・ヤンチャ」型と「反抗的・まじめ」型によって形成される第四群であろう。

数量化Ⅲ類によって析出された類型を、安易に組み合わせることはつつしむべきであろう。また、ここまでの分析は自己像からみた学校生活の限られた部分をとらえたにすぎず、第3章での学校生活に関する分析を単に補完するものでしかない。しかし、一定の限界を認めた上でもこの4つの群への再構成は、現代の中学生像とそこに潜む問題を明らかにするために有効であると思われる。とくに、女子中学生像を明らかにするには有効である。

そこで、次に今回とくに目をひいた女子中学生像について触れておきたい。

女子中学生の乱れを考える時、その原因は男子の場合と共通するものが多いであろうが、異なるものとして考えられるのは、女性としての「羨」と彼女たちを取り巻く環境とのギャップであろう。女子には、当然のこととして家庭で女性としての「羨」がなされる。その「女らしさ」とは、対極としての「男らしさ」の存在を同時に認識することによって際立つものである。最近、中学校では正しい事が正しい事として通用しないという声をよく耳にする。男子生徒が間違いを間違いとして正す態度を身に付けることなく、歪んだ形で「男らしさ」を内面化し、しかも

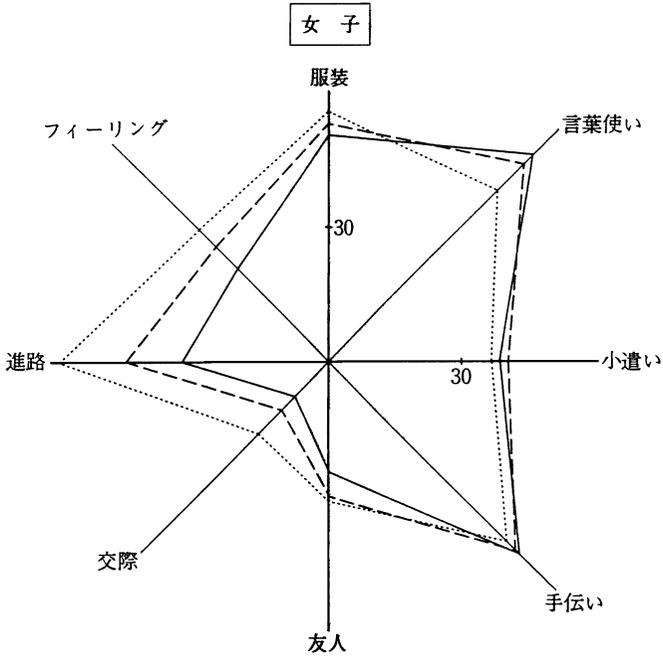
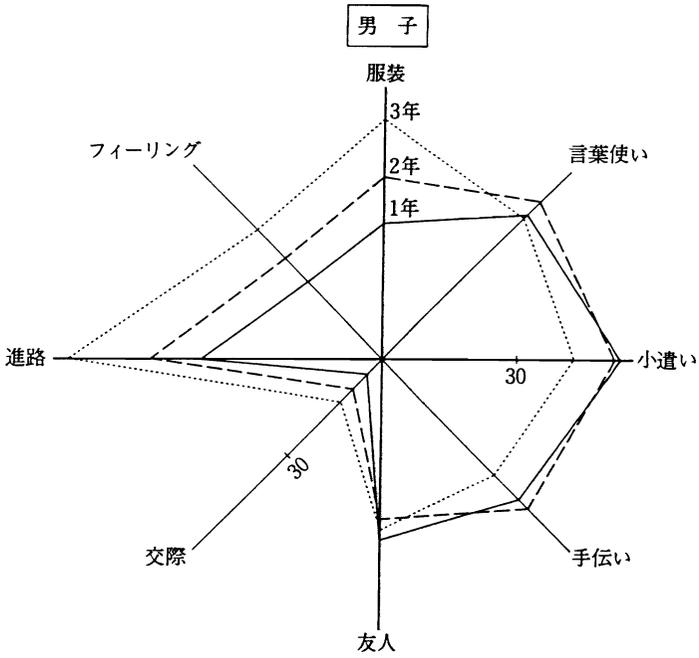


図7 親子ギャップ

家庭では優れた「受験能力」を身に付けた生徒、つまり「受験戦士」になることがまず第一に考えられ、「男らしさ」やその他の人間として必要な「能力」が二の次にされている。とすれば、このような状況は、女子中学生が「女らしさ」を身につけねばならないことを正当化し、さらにそれを支える「信憑性構造」(P. L. バーガー)の弱体化を助長しているといえよう。

それでは現代の中学生は、どのような家庭生活を送っているのだろうか。今回は、とくに男女差に注目しながら、「親子ギャップ」の視点を中心にその一面を垣間見ておきたい。

図7からもわかるように、ギャップ構造はやや異なっている。男子ではやはり「将来の進路をめぐって」で、学年が上がるにつれて40.6%から69.5%にまで達している。また、「服装やヘアースタイル」が一年生で30.3%であったものが、3年生で53.1%と増加する。「男女交際」は、男女とも徐々に増えつつあるが、全体的には非常に少ない。フィーリング・ギャップは、確実に増加している。また、服装についてのギャップが、男子についても3年生になると女子と同じくらいまで増加していくのも目をひく。また、家の手伝いをめぐって親とギャップを感じるのは、男子が40%前後、女子が50数%で、女子の方が多い。親孝行だと思えるのは20%弱、思わない子が30数%で、思う子が多い。3年生の女子を筆頭に、「親孝行でない」と思う者は、女子が男子をつねに10%ほど上まわっている。

前述したように、女子は「反抗的・おとなしい子」から「従順的・イジケ」型へと移行していく。先に指摘した4つのタイプの配役群では、平均値によると女子は第三群、男子は第四群に属する。男子については、軸近くにプロットされるので断言しにくいですが、女子については、3年生が明らかに第三群である。現代の中学校の荒廃を支えるという第三群が特性を考える時、現代社会の歪みが女子中学生に象徴的に現われていると思われる。

「反抗的」から「従順的」への移行が、「おとなしい子」から「イジケ」への移行を伴っていることから、彼女達の心の中に何かふっきれないものを残しつつづけていることがわかる。このように、確かに問題を孕んだ女子中学生ではあるが、「荒れる」というよりは、むしろ「葛藤する女子中学生」として捉える方が適切であろう。

II 友人と仲間関係意識

これまでは、中学生のセルフ・イメージを明らかにしつつ、さらにそのかぎりでの学校生活の一面面をとり上げてきた。また、若干ではあるが、家庭生活についても触れてきた。

中学生という時期はいうまでもなく、「意味ある他者」が家族の絶対的現実一元化されていた段階からある意味で「脱家族化」していき、より大きな世界を構築すべく「標流」する時期である。このドリフトを活性化させ、新しい we-feeling を追求するためには「友」なる他者が必要である。

そこで、次に中学生本人及び家庭といった部分から、友人論、仲間論へと進めていこう。

ある。これらの表から、現在の中学生が属性別、行動別に何人の友人をもっているかがうかがえる。

まず、「属性別友人数」であるが、現代の中学生の平均友人数は、8.5人となる。異性の友達、年上・年下の友達がいかに少ないかがよくわかる。また、小学校時代の同級生との関係が薄れていく様子もよくわかる。さらに「いま違う中学校」の者は、1.1人ととどまる。

次に「行動別友人数」であるが、「ラジオやテレビの話をする」は平均3.6人で、全学年を通じて多く、女子の方がやや多い傾向がある。次に多いのが「学校や先生の不満を言う」で、平均3.2人であり、2年、3年女子では4.2人にまで達する。「異性のことを話す」は、1年男子が一番少なく1.1人で、3年女子が一番多く3.8人にもなっている。「自分の悩みや心配事を打ち明ける」は、平均1.7人で、これも女子の方が多い傾向にある。注目に値するのは「勉強のことを話す」が、平均2.0人しかいないことである。わずかに女子の方が多いが、3年生になっても男子1.8人、女子2.4人しかいない。

このように、友人との関係は、「ラジオやテレビの話」と「先生や学校への不満」を中心にしたダベリによって成立しており、互いの家に行き来したりする親しい関係はそれほど多くはない。

では、集団レベルではどうであろうか。圧倒的に「ダベリ中心」のグループが多い。1年生男子では、「その他の趣味が同じ」グループが33.3%で一位であるが、学年が進むにつれて急速に「ダベリ中心」グループに押されていく。また「勉強中心」のグループは全体的に少ないが3年生が最低であるのは特記しておく必要がある。「ダベリ中心」のグループとはどのような特徴

表4 仲間集団のタイプ

回答肢 学年 性		勉	ス	音	その	ダ	そ	N	計
		強	ポ	楽	他の	ベ	の		
		中	ー	好	趣味	リ	他		
		心	ツ	き	が同	中			
			心		じ	心			
1年生	男子	1.4	14.2	—	33.3	22.7	17.0	11.3	100(141)
	女子	1.4	9.2	2.1	10.6	43.7	26.1	7.0	100(142)
2年生	男子	1.8	15.0	6.6	22.8	35.3	5.4	13.2	100(167)
	女子	2.9	15.8	2.9	8.8	46.8	15.8	7.0	100(171)
3年生	男子	1.3	12.5	4.4	18.1	39.4	13.1	11.3	100(160)
	女子	0.7	5.4	2.7	8.7	58.4	18.1	6.0	100(149)
全 体		1.6	12.2	3.2	16.9	41.2	15.6	9.4	100(930)

表5 仲間集団のタイプと特性

特 性 タイプ	特定のリーダーがいて 全体をひっぱっている	だ 全体的に活発で行動的	けてや っているグループのだけれが困 ってればみんなまで助 けてやる	考える 個人的な用事よりもグ ループのことを第一に 考える	ことがある グループ以外の人や他 のグループとはりあう ことがある	そのグループのことは まわりの人にもよく知 られている
勉強中心	13.3	33.3	73.3	15.3	—	53.3
スポーツ中心	12.4	72.6	71.7	27.4	20.4	54.0
音楽好き	6.7	53.3	60	20	10	53.3
その他の趣味が同じ	12.1	59.2	63.7	22.9	10.2	47.1
ダベリ中心	7.8	48.0	61.6	15.9	12.8	58.2
その他	12.4	61.4	74.5	22.8	13.8	60.0
N A	12.6	59.8	55.2	28.7	11.5	54.0
全 体	10.3	56.0	64.7	20.9	13.0	55.5

を持つのであろうか。まず、リーダーの欠如、個人の優先、非対抗性があげられよう。相互扶助と活動性は低くはないが、他のグループと比較すると高いわけでもない。ただ、他者の認知のみが若干高いといえる。このように、仲間集団も中学生の強い友人関係を引き出すには至らない。しかし、漠然とした「友だち」の総和、3人以上のグループ行動においてそうだとすると、彼らの友人関係が決定的に貧困だときめつけるわけにはいかない。そこで、次に「一番の親友」という限定されたレベルで考えてみたい。

まず、その殆どが同性、同年齢であった。その中で31.8%は、今現在同じクラブにいる。さらに、小学校の時に同じクラスになったことがある者が44.8%であり、中学2年生、3年生については、中学に入ってから同じクラスになったことがある者が39.0%ある。それに比べて、「家がすぐ近い」者は34.4%に留まっている。又、「お互いの家に行ったり来たりする」者は約半数でしかない。最近、放課後友達とあまり遊ばず、塾に行く子が増え、塾は友達との一種の交流の場としての意味をもちはじめてきているといわれている。しかし、「塾が同じ」と答えた者は15.1%しかいない。「クラブが同じ」者は32.0%であり、やはり塾で「親友」ができることは少なく、クラブの方が多いうのである。

「話題」は全学年を通して女子の方が豊富である。特に「悩みや心配事」と「異性の話題」は、男子との差が大きい。また行動別友人数をみると、前者は全体の平均が1.7人であり、ほぼ親友に限られていることがわかる。また後者では、女子は1年2.8人、2年3.6人、3年3.8人で親友に限らず、他の友人とも話題にしていると思われる。中でも非常に目を引くものは「先生や

学校に対する不満や文句を言う」で、1年生女子で67.2%，2年生女子で70.7%，3年生女子で62.4%に達している。行動別友人数を見ても3.0人，4.2人，4.2人で、かなり多い方である。特に、2年女子は「『ヤバイ』ような事もいっしょにする」が、43.1%もあり、全体として男子より女子の方が数字の上からは「反抗的な」ようにみられる。

この「一番の親友」に関するデータを整理するために、ここでもⅢ類によるパターン分析を試みてみた。その結果、意味ある二つの軸が析出された。Ⅰ軸の相関係数は0.5098，Ⅱ軸の相関係数は0.2910であった。

まず、Ⅰ軸の検討から始めよう。Ⅰ軸上に占める各アイテム・カテゴリーのウェイトのマイナスの絶対値の大きい項目は、「『ヤバイ』ようなこともいっしょにする」「商店街やゲームセンターなどの遊び場へよくいっしょに行く」「お金の貸し借りやおごったりしあう」「あなたの家によく来る」「店屋にいっしょに行ったり買物をつきあったりする」「勉強のことを話したりいっしょに勉強する」などであり、広範囲にわたって、一番の親友とのつながりが非常に強い傾向を示している。

Ⅰ軸のプラス項目は、「その友達と自分が仲のよいことを学校の先生は知らない」「店屋にいっしょに行ったり買物をつきあったりすることはない」「お金の貸し借りやおごったりしあうことはない」「ラジオやテレビの番組の話はあまりしない」「先生や学校に対する不満や文句をいいあったりしない」「自分の悩みや心配事を打ち明けたりすることもない」などであり、一番の親友とのつながりが全般的にあまり強くない傾向を示している。

したがって、Ⅰ軸は＜関係の深い—浅い＞をしめす尺度であることがわかる。

次に、Ⅱ軸に関するアイテム・カテゴリーでマイナスの絶対値の大きな項目は、「その子の家によく行く」「自分の家によく来る」「同じ塾に通っている」「異性のことについて話したりしない」「自分の悩みや心配事を打ち明けたりしない」「その友達と自分が仲のよいことを学校の先生は知らない」「先生や学校に対する不満や文句を話したりしない」などであり、一番の親友とのつながりが、学校に拘束されておらず、むしろ学校外で交際している傾向がある。

Ⅱ軸のプラス項目は、「その子の家にはあまり行かない」「自分の家にはあまり来ない」「異性のことをよく話題にする」「その子と仲がいいことを家の人は知らない」「店屋にいっしょに行ったり買物をつきあったりするようなことはない」「『ヤバイ』ようなこともいっしょにする」「先生や学校に対する不満や文句を言う」「自分の悩みや心配事を打ち明けたりする」「その子と仲がいいことを学校の先生は知っている」などであり、学校内のつきあいに留まる傾向がある。

したがって、Ⅱ軸は＜校内—校外＞つまり、つきあいの場が校内であるのか、校外であるのかをわける尺度である。

こうして、数量化Ⅲ類による処理によって現代中学生の一番の親友像の四類型を描くことができる。

第1象限は、関係が浅く「校内」派である。お互いの家に行ったり来たりすることもなく、商

表6 カテゴリーウェイト表

アイテム・カテゴリー	実数	I 軸	II 軸
クラブが同じ			
1. はい	349	-0.84709	0.18464
2. いいえ, NA	740	0.39952	-0.08698
塾が同じ			
3. はい	164	-0.86336	-1.62488 (3)
4. いいえ, NA	925	0.15308	0.28816
その子のお家によく行く			
5. はい	540	-1.00242	-2.07090 (1)
6. いいえ, NA	549	0.98601	2.03709 ①
あなたの家によく来る			
7. はい	572	-1.02776 (4)	-1.82608 (2)
8. いいえ, NA	517	1.13712	2.02048 ②
お店にいっしょに行ったり買物をつきあったりする			
9. はい	692	-1.02278 (5)	-0.65682
10. いいえ, NA	393	1.81138 ②	1.16342 ⑤
商店街やゲームセンターなどの遊び場へよくいっしょに行く			
11. はい	420	-1.37118 (2)	-0.81373
12. いいえ, NA	669	0.86085	0.51097
ラジオやテレビの番組の話をよくする			
13. はい	702	-0.78209	0.47382
14. いいえ, NA	387	1.41870 ④	-0.85930
共通の趣味の話をしたり, それをする			
15. はい	615	-0.78925	0.13285
16. いいえ, NA	474	1.02406	-0.17222
マンガ(雑誌や本)の話をよくする			
17. はい	537	-1.01206 (7)	0.28470
18. いいえ, NA	552	0.98458	-0.27683
異性のことをよく話題にする			
19. はい	553	-0.99984	1.48395 ③
20. いいえ, NA	536	1.03158	-1.53088 (4)
先生や学校に対する不満やもんくを言う			
21. はい	610	-0.95774	0.99365 ⑦
22. いいえ, NA	479	1.21969 ⑤	-1.26525 (7)
お金の貸し借りやおごったりしあう			
23. はい	623	-1.10385 (3)	-0.17838
24. いいえ, NA	466	1.47578 ③	0.23863
勉強のことを話したりいっしょに勉強する			
25. はい	576	-1.01786 (6)	0.16315
26. いいえ, NA	513	1.14289 ⑦	-0.18305
自分の悩みや心配事をうち明けたりする			
27. はい	632	-0.87095	0.97761
28. いいえ, NA	457	1.20449 ⑥	-1.35181 (5)
「ヤバイ」ようなこともいっしょにする			
29. はい	328	-1.43688 (1)	1.09001 ⑥
30. いいえ, NA	761	0.61932	-0.46972

アイテム・カテゴリー	実数	I 軸	II 軸
学校の先生も知っている			
31. はい	628	-0.76713	0.95129
32. いいえ, NA	461	1.04506	-1.29574 (6)
家の人も知っている			
33. はい	954	-0.31326	-0.18978
34. いいえ, NA	135	2.21254 ①	1.33222 ④
相 関 係 数		0.50977	0.29098

※ ○の中の数字はプラスの側の1位から7位
 ()の中の数字はマイナスの側の1位から7位

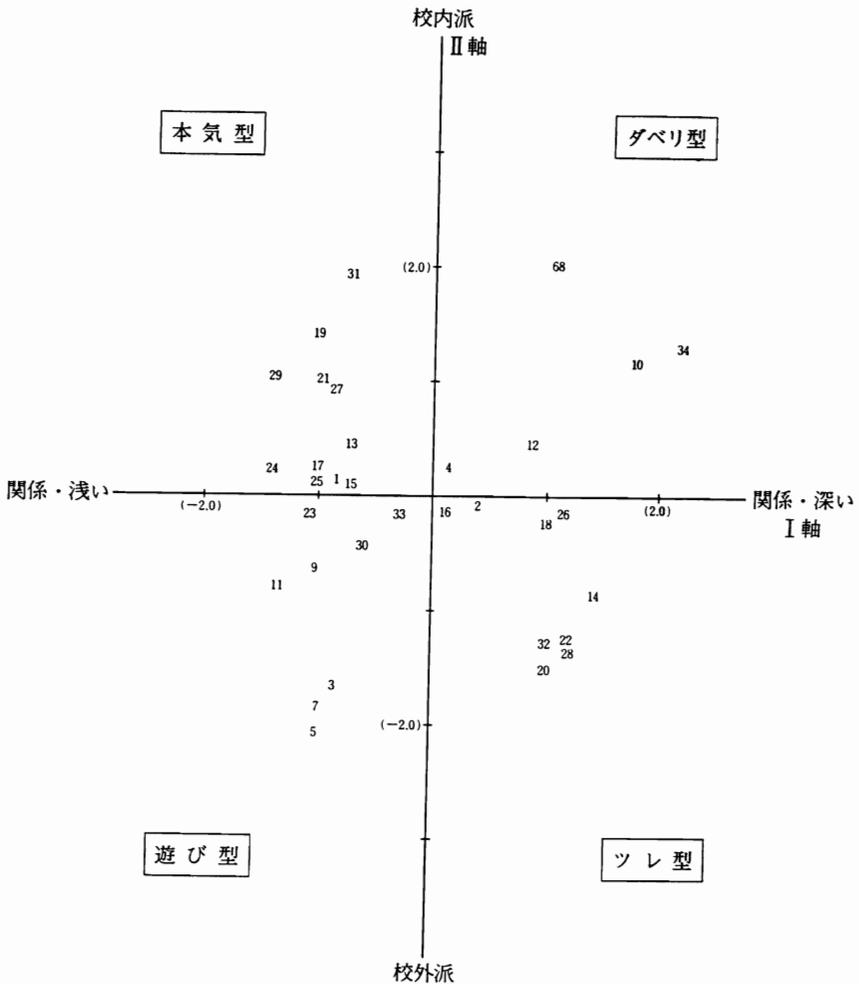


図8 中学生の「一番の親友」類型

店街やゲームセンターなどにいっしょに行くこともなく、家の人も知らないようなタイプである。これを「ダベリ」型と名付ける。

第2象限は、関係が深く「校内」派である。異性の話をしたり、みつかると「ヤバイ」ような事もいっしょにし、学校への不満を言ったり、悩み事を打ち明けたりするようなタイプである。これを「本気」型と呼ぼう。

第3象限は、関係が深く「校外」派である。お互いの家に行ったり来たりし、塾が同じであったり、商店街やゲームセンターなどの遊び場へよく一緒にいたりするタイプである。これを「遊び」型と名付ける。

第4象限は、関係が浅く「校外」派である。勉強の話をしたりする事はなく、学校への不満を言ったり悩みを打ち明けたりすることもなく、学校の先生も知らないタイプである。これを「ツレ」型と呼ぶ。

このようにして親友像は「ダベリ」型、「本気」型、「遊び」型、「ツレ」型の四つに類型化することができる。

セルフ・イメージと同様、関連する項目を取り出し、各タイプのプロフィールをよりはっきりさせてみよう。

女子は「本気」型、男子は「ツレ」型が多いことがわかる。学年別にみると、男女とも学年が進むにつれて「校内」派傾向が強くなっていく。また、2年生は1年生に比べて、「関係が深く」なる傾向にある。しかし、それが3年生になると逆戻りして「関係が浅く」なっていく。その原因の第一にあげられるのは、やはり「高校受験」であろう。それは、図10によく表われている。

「ダベリ」型は、3年男子に多い傾向がややあり、一人っ子、4人以上の兄弟のある子に多い。「落ちこぼれ」ている、その心配は全くないの両極端の子どもがこのタイプである。また、登校時の気分もあまり冴えない。

「本気」型は、女子に多く、スポーツ・文化、両方のクラブに所属している者に多い。親身になって相談のしてくれる先生、友達みたいに何でも話せる先生を求め、朝「友達にはやく会いたいなあ」と言いながら家を出る子、もし中学校が義務教育でなくなっても、友達に会えて楽しいから学校へ行く子で、友達なしには学校生活は語れないといったタイプである。

「遊び」型は、朝家を出る時からもうクラブの時間を楽しみにしている子に多い。また仲間集団ではリーダーがいて、グループより個人を優先する子である。商店街やゲームセンターにつれだって行く子、塾を通じた付き合いをしている子である。学校生活に拘束されず親友との関係を維持しているが、学校生活においても同様に友人関係を持っているか、それとも学校生活には魅力を失ってしまっているのかによって評価は異なる。

「ツレ」型は、男子、特に1、2年の男子に多い。クラブ活動に参加していない子、仲間集団のない子、勉強中心、趣味が同じグループの子で、校則も「決まっている方がいい」「厳しい方がいい」という子である。よくわかる授業をする先生、クラブや学級活動に熱心な先生を求めている

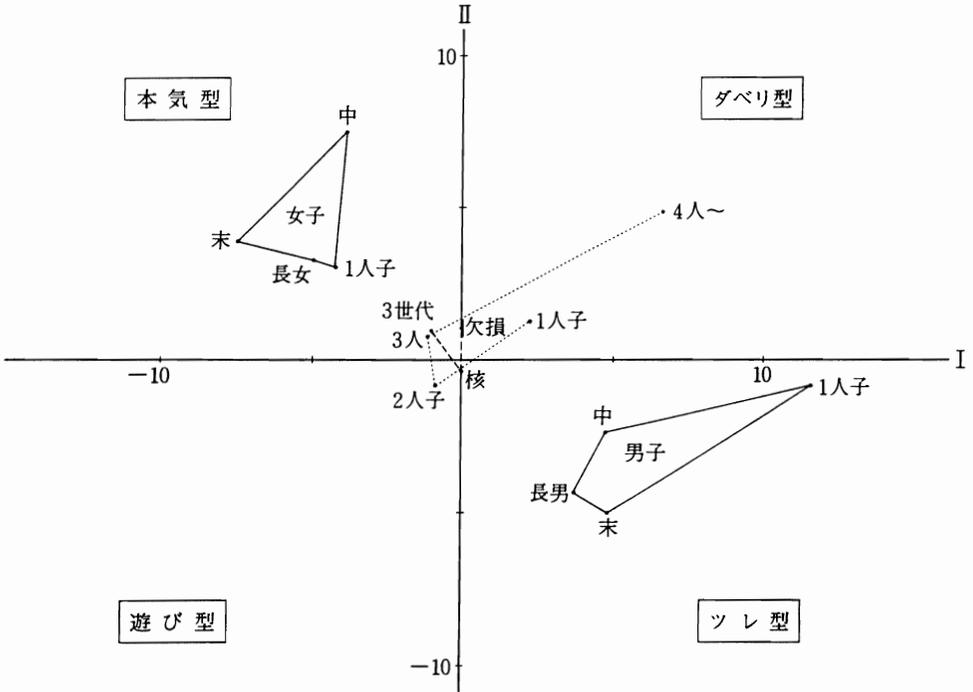


図9 一番の親友と関連項目（一般属性）

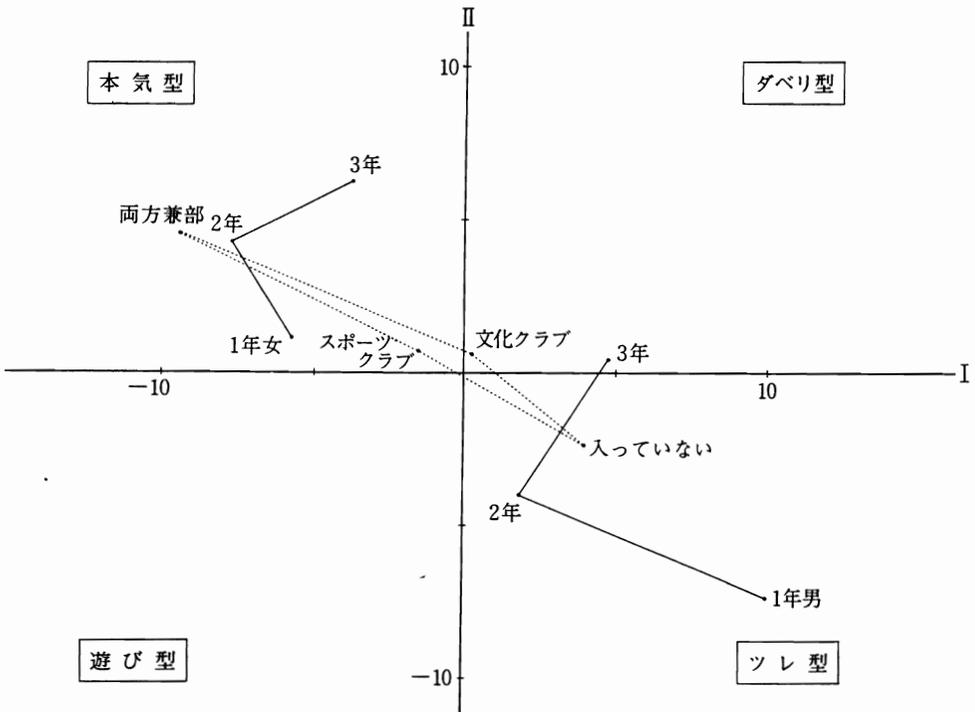


図10 一番の親友と関連項目（校内属性）

る。「本気」型が教師に対して生身の人間的な側面を求めるのに対して、「ツレ」型は、教師としての役割を完全に遂行することを求めている。登校気分も「しかたがないから行こうか」「宿題のことが心配だなあ」とスッキリしない。また、もし中学校が義務教育でなくなったら、一人で勉強する、勉強しておかないと困るから学校へ行くという子で、学校の勉強や校則には順応しているかに見えるが、友達同士、教師との心のふれあいのある楽しい学校生活といったイメージはここから出てこない。

このように、親友の4類型が析出できるが、この中で、強い友情によって結ばれているといえるのは「本気」型であろう。前述したように、女子が「本気」型である。しかしこの「本気」型はその交際場所が校内に限られる傾向が強い。お互いの家に行ったり来たりすることはない。つまり、学校を離れた時には、その関係は急速に弱まって不思議ではない。次に強い友情が認め

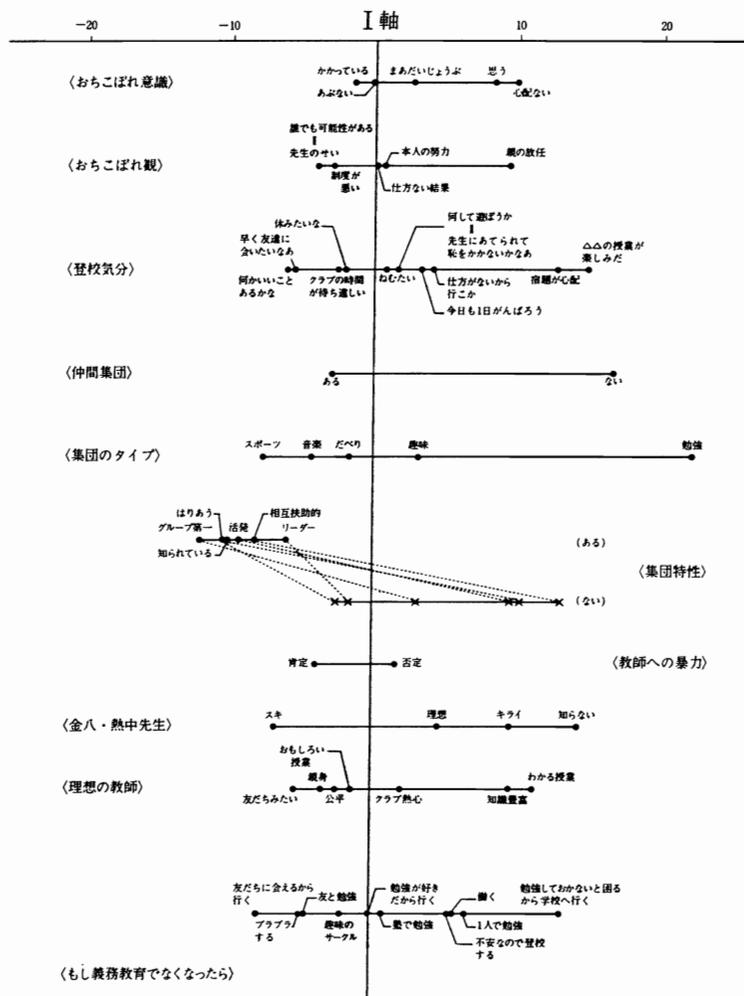


図11 I軸 一番の親友と関連項目

られそうなのは、「遊び」型である。しかし、前述したようにこのタイプについては、学校生活へのその子の期待及び満足度などによって評価が異なってくる。むしろ、4類型のうち「ダベリ」型、「ツレ」型の方が現代の中学生の親友像の特徴をよく現わしているのではないだろうか。つまり、現在の中学生の友人関係は、一番の親友ですら強力であるとは言いがたいようである。

これまで、中学生本人、親子ギャップ、友人関係、そして一番の親友に関する考察を行ってきた。中学校を舞台に登場する4つのタイプの配役群、葛藤する女生徒、親との間のギャップに悩む中学生、ダベリ型仲間集団、ダベリ型・ツレ型親友、これらは全て中学生本人に留まる問題ではない。むしろ中学校自体の問題としてとらえ直すことが必要である。

子どもは社会の鏡である。しかし、社会の縮図をそのまま中学生に適用してもとらえきれない部分が残る。固有の世界がある。しかし、そこに目を奪われると今度は逆に社会との関係が見えなくなる。これらの危険性に注意を払いつつ、中学生と彼らを取り巻く社会に目を向けてみる。

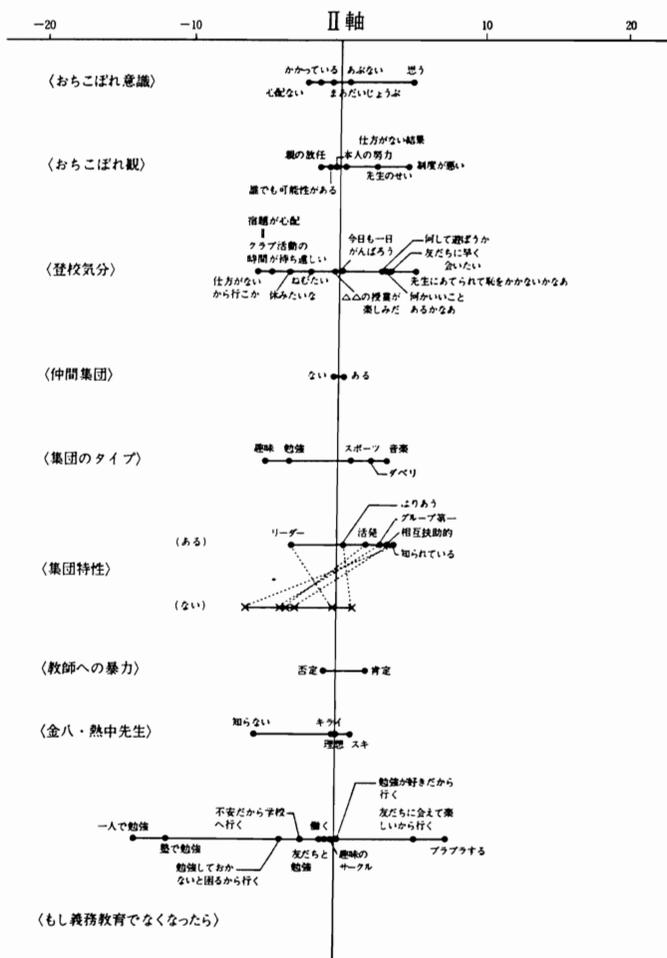


図12 II軸 一番の親友と関連項目

すると、そこに荒れる中学校と歪んだ社会をつなぐある過程が存在しているのに気づく。後に述べるようにわれわれはそれを「生徒化」過程と強く関わるものと考えている。

中村雄二郎が「制度としての〈子ども〉」を論じたように、彼らは「中学生としての〈子ども〉」「生徒としての〈子ども〉」でしかない。「学校生活への不適応」を「日常生活すべての社会的不適応」と混同し、「生徒であることへの拒絶」を「もはや〈子ども〉でないこと、〈大人〉になる資格の喪失」と混同するようになる。

この点を問題にしない限り、中学生の「無自覚的といえ無自覚的、幼稚といえ幼稚であるけれど、それだけ切羽つまった〈異議申し立て〉」⁶⁾に対して、適確な解答は示せないであろう。

われわれは、ここで日常の学校生活に目を転ずる中で、この問題にせまっていきたい。

Ⅲ 学校観の諸相

「学校化社会」の中で中学生たちは、きわめて閉鎖的な日常性を余儀なくされている。それは単に学校だけにとどまらず、学校外生活をも含みこんだ全生活体系を支配しているといっても過言ではない。自分とは何か、友人関係とは何か、家庭生活とは何か、をこの学校化原理と切り離して考えることはできなくなっている彼らの日常を、決定づけているものは、やはり学校生活の現実であろう。そこで次に、学校という「舞台」そのものを考察するわけだが、ここでも数量化Ⅲ類による分析を手がかりに、彼らの学校観を主に考察していくことにしよう。

学校生活関連項目として採用したデータは、「勉強観」「落ちこぼれ観」「自分の落ちこぼれ度」「登校気分」「もし義務教育でなくなったら」「理想の教師像」「理想的教師の存在」「金八・熱中先生観」「教師の体罰」「教師への暴力」「クラブ活動」「HR・生徒会活動」「校則観」「校則評価」の14の質問領域である。これら90マイテム・カテゴリーを数量化Ⅲ類によって分析した結果、意味のある2つの軸が析出された。各アイテム・カテゴリー別のスコアは表7に示したとおりである。

この2つの軸の説明からはじめよう。まず第1軸はプラス側では、「生徒をつばりつけるだけの規則は全部なくすべきだ」「義務教育でなくなったら、学校へは行かず働く」「下校時間は決まっていない方がよい」「自分は落ちこぼれだと思う」「対教師暴力はがまんができない時にはやむをえない」「たばこやシンナーの禁止はない方がよい」「ヘアスタイル・パーマの制限はない方がよい」「落ちこぼれは制度が悪い」など、学校を拒否するようなカテゴリーがくる。

一方、マイナス側には、「映画などの保護者同伴は決まっている方がよい」「対教師暴力はそう考えることも、そうすることもいけない」「今日も1日がんばろう」「義務教育でなくなっても勉

6) 中村雄二郎「パトスの知」(筑摩書房, 1982) p. 115.

表7 カテゴリー・ウェイト表

アイテム・カテゴリー		実数	I 軸	II 軸
勉 強 観	上級学校では遊べなくなるから、今のうちに遊んでおこう			
	1 賛成(まったくそうだ・そういう気もする)	697	0.16416	-0.59345
	2 反対(そうとはいえない・まったくちがう)・NA	429	-0.24588	0.99041
	よい学校に入れないと困るので今はがまんして勉強すべきだ			
	3 賛成	739	-0.51312	0.20860
	4 反対・NA	383	1.01172	-0.36695
	押しつけられてやる勉強はホンモノではない			
	5 賛成	1013	-0.10767	-0.25748
	6 反対・NA	109	1.07123	2.51840 ⑩
	人間にとって勉強は死ぬまで続くものだ			
	7 賛成	609	-0.52742	0.22136
	8 反対・NA	513	0.64227	-0.23627
観	学校の勉強ばかりしていると心がまずしくなる			
	9 賛成	731	0.31058	-0.35326
	10 反対・NA	391	-0.55948	0.69530
	人間は本来勉強ぎらいな性格をもっている			
11 賛成	727	0.42178	-0.14896	
12 反対・NA	395	-0.75534	0.30863	
「落ちこぼれ」 観	13 本人の努力しだい	616	-0.82653	-0.12634
	14 先生の指導の仕方が影響	77	1.65929	0.11945
	15 できる子・できない子ができるのはしかたない	106	1.32762	0.22530
	16 やる気をなくすと、だれだってその危険あり	144	0.50747	-1.13782 (6)
	17 親の放任がいちばん問題	69	-0.65030	0.44798
	18 本人より学校制度が悪い	66	2.24095 ⑧	0.04105
	19 その他・NA	44	1.65533	4.28593 ③
「落ちこぼれ」 度	20 「落ちこぼれ」だと思う	105	2.63017 ④	2.25389
	21 「落ちこぼれ」かかっている	166	1.27916	0.65542
	22 ゆだんをすると危い・NA	527	-0.23337	-0.94158 (9)
	23 まあ、その心配はないだろう	258	-1.12960	0.07808
	24 まったく、その心配はない	66	-0.99710	2.18516
登 校 気 分 *	25 友だちに早く会いたい	426	-0.30140	-1.41644 (4)
	26 クラブ活動の時間が待ちどおしい	133	-0.74762	-1.80731 (2)
	27 △△の授業が楽しみだ	118	-1.58287 (5)	1.45613
	28 きょうはいいことあるかな	454	-0.51220	-0.95258 (8)
	29 先生にあてられて恥をかかないかな	56	-0.87092	1.34147
	30 宿題のことが心配だ	51	0.10335	0.25945
	31 きょうも1日がんばろう	152	-1.76142 (3)	0.98884
	32 何して遊ぼう	108	0.91261	-0.47502
	33 とにかく眠い	216	0.72372	0.12295
	34 休みたいなあ	148	1.93283	2.21508
	35 しかたないから行こうか	134	2.19863 ⑨	3.07652 ⑤

現代中学生の意識分析（岩見・富田）

	アイテム・カテゴリー	実数	I 軸	II 軸
「義務教育でなくなっ たら」	36 学校へは行かず働く	91	2.96434 ②	1.47904
	37 学校以外で勉強を続ける（一人で・友だちと・塾で）	200	-0.92256	-0.47443
	38 趣味のサークルやスポーツ教室に通う	149	0.56349	-0.76287
	39 どこにも所属せずブラブラしている・その他・NA	110	2.02470 ⑩	2.71162 ⑦
	40 何となく不安だから学校へ行く	103	-0.46953	1.32479
	41 友だちと遊べて楽しいから学校へ行く	274	-0.04498	-2.56636 (1)
	42 勉強のために学校へ行く	195	-1.65618 (4)	1.82572
理想の教師像*	43 親身になって相談ののってくれる先生	350	-0.16171	-0.01197
	44 クラブ・学級活動に熱心な先生	102	-1.04564	-0.34004
	45 何でも話せる友だちみたいな先生	545	0.39977	-0.93792 ⑩
	46 えこひいきをしない先生	242	0.30721	-0.16360
	47 全員によくわかる授業をしてくれる先生	270	-0.78060	1.49930
	48 おもしろ・おかしく授業をしてくれる先生	443	0.29465	-0.73464
	49 教科についての知識の豊富な先生	114	-1.33717	2.83026 ⑥
師理 の 想 存 的 在 教	50 2人以上いる	551	-0.99982	-0.23725
	51 1人だけいる	201	0.29777	-0.58049
	52 1人もいない・NA	370	1.34955	0.70544
「金八先生」 親	53 知らない・NA	92	-0.73809	4.62806 ②
	54 きらいだ・つくり話だ	142	1.51490	2.65214 ⑧
	55 身近にいてほしい	576	0.06000	-1.32458 (5)
	56 現実にはいないと思うが理想的だ	312	-0.55606	-0.08270
教師の「体罰」	57 ぜったいなぐってはいけない	196	1.88621	0.77051
	58 その生徒が本当によくする場合にはいい	389	-0.16784	-0.85866
	59 良し悪しをはっきりさせるには時には必要・NA	397	-0.64346	-0.43428
	60 先生だって感情的になってなぐりたい時もある	72	0.75573	-0.14862
	61 最近の生徒はたるんでいるから必要	72	-1.35645 ⑩	5.24968 ①
教師への「暴力」	62 そう考えることも、そうすることもいけない	120	-1.97020 (2)	2.62657 ⑨
	63 そういう気持ちになっても、してはいけない	674	-0.69715	-0.71865
	64 がまんできない時にはやむをえない	200	2.57664 ⑤	0.61854
	65 答えたくない・NA	128	1.55674	0.46165
クラブ活動	66 入っていない・NA	257	1.15748	2.13131
	67 運動クラブ・両方兼部・クラブ名不名	641	-0.09054	-0.98936 (7)
	68 文化クラブのみ	224	-1.03193	0.44669
徒日 会R 活 動 生	69 熱心（ひじょうに・まあ）	187	-0.97284	-0.37087
	70 どちらともいえない・NA	411	-0.41101	-0.65657
	71 熱心でない（あまり・まったく）	524	0.68536	0.67330
校則 観 （ 一 般 ）	72 ついだらしなくなるから、きびしい方がいい	70	-1.44984 (7)	3.40260 ④
	73 中学生だから、ある程度きびしいのもやむをえない	289	-1.40257 (9)	0.29254
	74 他に迷惑をかける子がいるのでないと困る・NA	137	-1.19739	1.51873
	75 生徒全体の意見をもっととりいれてほしい	491	0.37499	-1.51612 (3)
	76 生徒をしかりつけるだけの規則は全部なくせ	135	3.66694 ①	1.68326

アイテム・カテゴリー		実数	I 軸	II 軸
校 則 評 価	下校時間			
	77 決まっている方がよい	967	-0.43341	0.04544
	78 ない方がよい・NA	155	2.75751 ③	-0.19538
	映画などの保護者同伴規定			
	79 決まっている方がよい	248	-2.06098 (1)	1.77397
	80 ない方がよい・NA	876	0.59428	-0.48776
	制服			
	81 決まっている方がよい	773	-0.61626	-0.00773
	82 ない方がよい・NA	349	1.38872	0.05613
	ヘアスタイル・パーマの制限			
	83 決まっている方がよい	760	-1.05959	0.16171
	84 ない方がよい・NA	362	2.24749 ⑦	-0.30189
	カッターやくつ下などの指定			
	85 決まっている方がよい	513	-1.50563 (6)	0.80123
	86 ない方がよい・NA	609	1.28188	-0.65258
	アルバイトの禁止			
	87 決まっている方がよい	515	-1.41646 (8)	0.49230
	88 ない方がよい・NA	607	1.21541	-0.39526
	たばこやシンナーの禁止			
89 決まっている方がよい	1026	-0.22955	-0.16542	
90 ない方がよい・NA	96	2.52476 ⑥	1.86298	
相 関 係 数			0.38122	0.27499

※ ○の中の数字はプラス側の1位から10位

()の中の数字はマイナス側の1位から10位

* 複数回答(2肢選択)の項目のため正反応のみをカテゴリー化している

強しに学校へ行く」「△△の授業が楽しみだ」「カッターやくつ下などの指定はあった方がよい」「校則はついだらしなくなるからきびしく」「アルバイトの禁止は決まっている方がよい」などが並び、学校制度への強い適応を表わしている。

このI軸のカテゴリー・スコアを属性別に平均した値が、図13に示してある。これを見ると、男子女子ともに学年が進むにつれ、プラス側に移行し、学校への不本意なコミットの感情、評価が高まるようである。目的をもった仲間集団をもっている子どもより、なんとなくダベリあうような仲間しかいない子どもに同様の傾向がみられる。一番の親友をもっていない子どもは、極端にプラス側にあり、現在過去を通じて一度も同級になったことのない子が一番の友だちだ、という子どもがそれに続く。これとは逆に、今はクラスは違うが、以前同級生だった子と一番親しいと答える者がマイナス方向に出てくる。属性とはいいがたいが、参考までに学習塾や家庭教師を利用している子どもの、それをやめた時の回答については、学校の勉強についていけない、親が勉強勉強とうるさくなると答える者が、プラス側におちる。これらをふまえ、I軸を<勤勉・順校-怠学・反校>の軸と解釈しておこう。

現代中学生の意識分析（岩見・富田）

次にⅡ軸の方に目を転じると、プラス側には「体罰は最近の生徒はたるんでいるから必要」「金八・熱中先生については知らない」「落ちこぼれ観・その他、NA」「校則はついでらしくなるからきびしい方がよい」「しかたないから学校へ行こうか」「教科についての知識の豊富な先生」「学校がなかったら、ブラブラ」「金八・熱中先生はきらい、つくり話」がきており、これだ

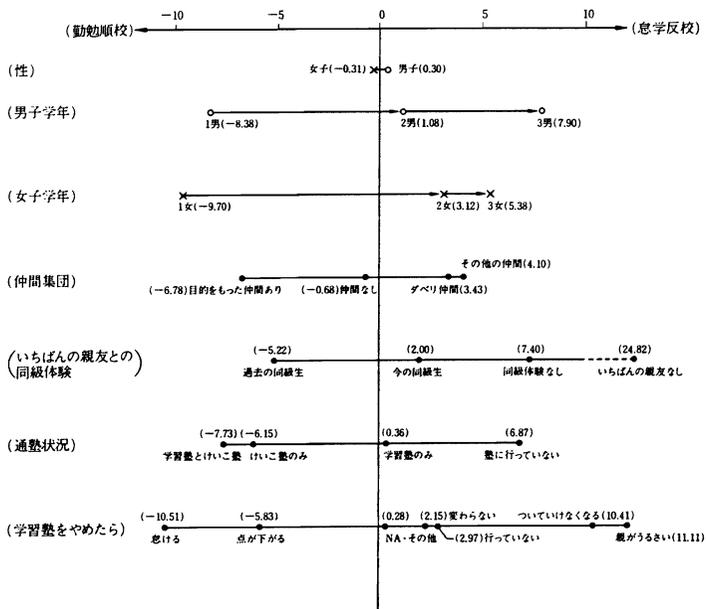


図13 サンプル・スコア平均点(×10²)——Ⅰ軸

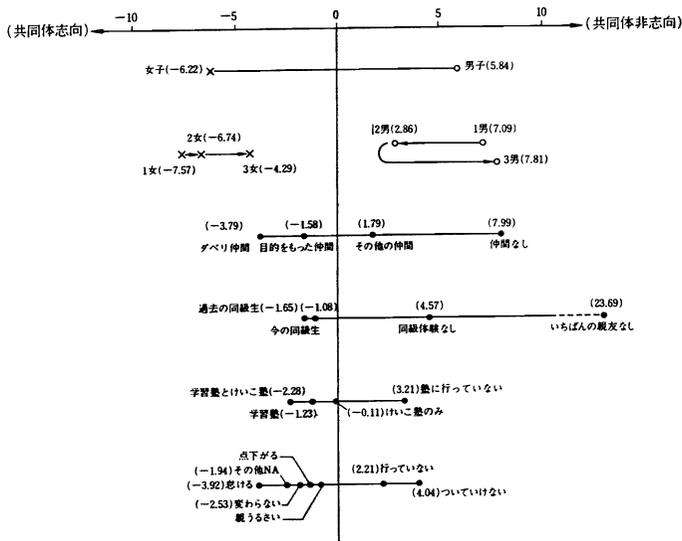


図14 サンプル・スコア平均点(×10²)——Ⅱ軸

けみると解釈しにくい。しかしマイナス側の、「義務教育でなくなっても友達と遊べて楽しいから学校へ行く」「クラブ活動の時間が待ちどおしい」「校則は生徒全体の意思をもっと取り入れてほしい」「友だちに早く会いたい」「やる気をなくすと誰だって落ちこぼれる危険あり」「運動クラブに所属」「きょうはいいことあるかな」が並ぶ。

全体をとおして、この第Ⅱ軸は、学校生活の基本に友だち関係に象徴されるような「共同体志向」が強いかわいさを表わしていると考えられる。属性別スコア平均値のプロットでも男女差、仲間等団の有無がこの事情を反映している（図14）。

図15は〈勤勉順校一怠学反校〉のⅠ軸と、〈共同体志向一共同体非志向〉のⅡ軸とをクロスさせて、90マイテム・カテゴリーの全部を4象限にプロットしたものである。これらの結果から、

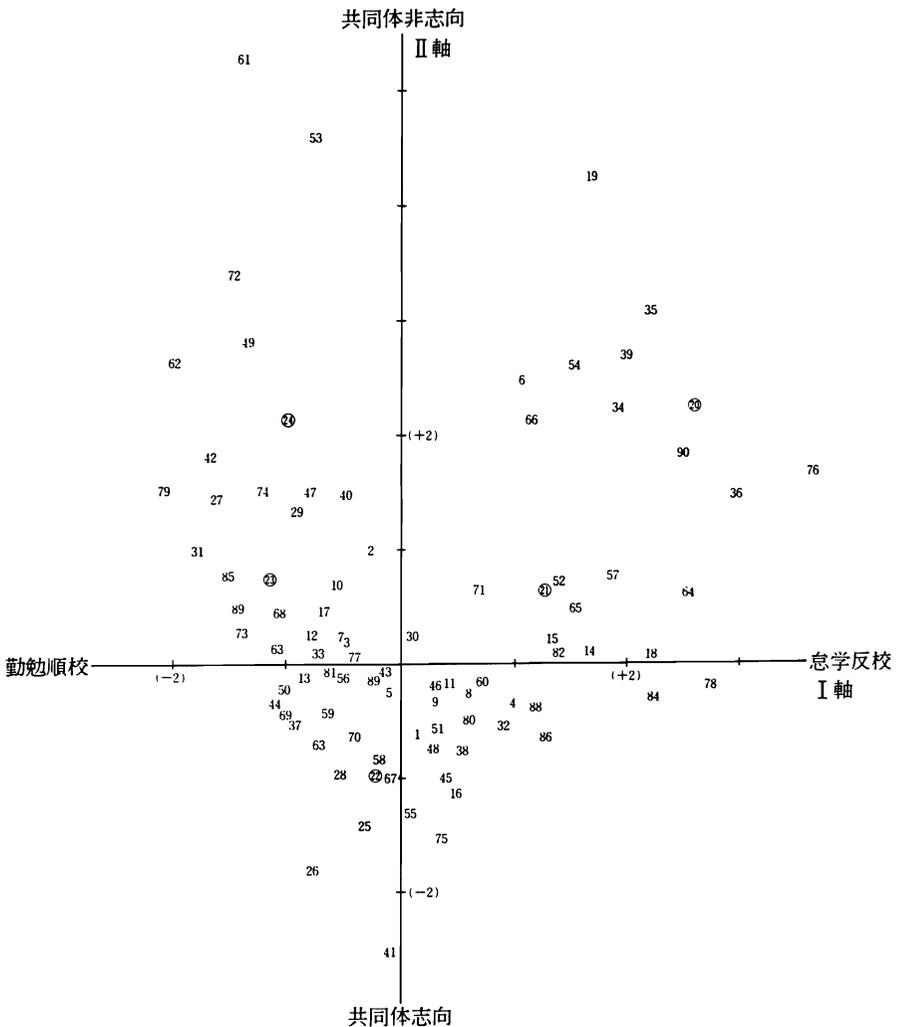


図15 中学生の学校観類型

われわれは現代中学生の学校観の4類型を描き出すことができる。

これにみられるとおり、第1の類型は、学校生活はもっぱら、義務履行のために不承不承登校し、勉強に熱意も自信もなく、友人関係や教師とのハッピーな出会いをもつこともなく、むしろ反抗的な気持をもっている生徒イメージである。これは学校生活そのものが不本意な強制に基づいていると考えられるので、学校＝＜強制連行・収容所＞観に近いものと解釈できる⁷⁾。

第2のタイプは、これとは逆に、自らの「中学生」ラベルを自覚し、未熟な部分を学校という枠組みによって律し、勉強することを第一義的に課題視する、中学生受験隊への志願兵である。ここでは「私塾」との対比で、学校＝＜勉強志願・公塾＞観と言っておこう。

第3象限は、友だち志向が強く、学校生活をクラブやクラス活動などを通じてエンジョイする学校の好きな子どものタイプである。ともすれば、孤独な闘いと禁欲を内面化している第2のタイプとは異なり、自分が通って生活している学校あるいはその一部を、コミュニティ的なものととらえ、それへのコミット、さらには楽しい＜学園＞生活を創造しようとする明るさを漂よわせている学校観である。

最後は、第3のタイプとは違い、学校の制度をエンジョイするというより、友だちと群れあい、カッコつきではあるが、拘束からの「自由」を志向し、学校を遊び発見の場、つまり＜たまり場＞としてイメージするタイプである。

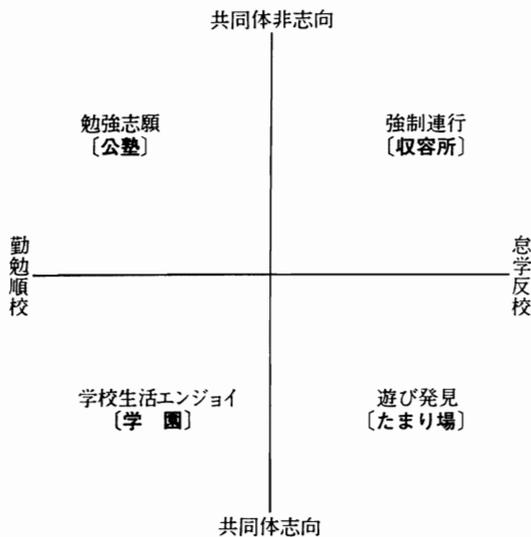


図16 学校観の4類型

7) 柴野昌山「現代の青年」（第一法規出版，1981）p. 168—70参照。彼の「収容施設」「U字型の学校社会化曲線」の指摘は、きわめて的確だと思われる。

この4類型を、他の属性、セルフイメージ、親友像と関連させながら、その内容をふくらませてみよう。この作業は、とりもなおさず学校観を核とした現代中学生の全体像をプロフィールする試みでもある。ここではケース得点による分析を各カテゴリーに属する子どものI軸II軸の平均点によって概要を示すことにしたい。

図17, 18, 19は、それぞれ属性、セルフイメージ、一番の親友との行動の各項目をこの4象限の布置関係でとらえようとしたものである。とくに図19においては、II軸の下半分のマイナス側に正回答がすべて集まり、負反応が上半分に集中している。これは軸の解釈と整合していると判断してよいだろう。

さてこれらをまとめてみると、〈収容所〉型は、中3男子、自らを落ちこぼれ視する子どもで、学習・けいこ塾へ通うこともあまりなく、通っているのは「補習塾」ぐらい。一番の親友はクラスメートでないことが多く、もっぱら親が知らない友人である。自らを学校と外とで態度や行動の違う人間とみなし、がまんがきらい、特技もなくエゴイスティックな人間だとしながらも、

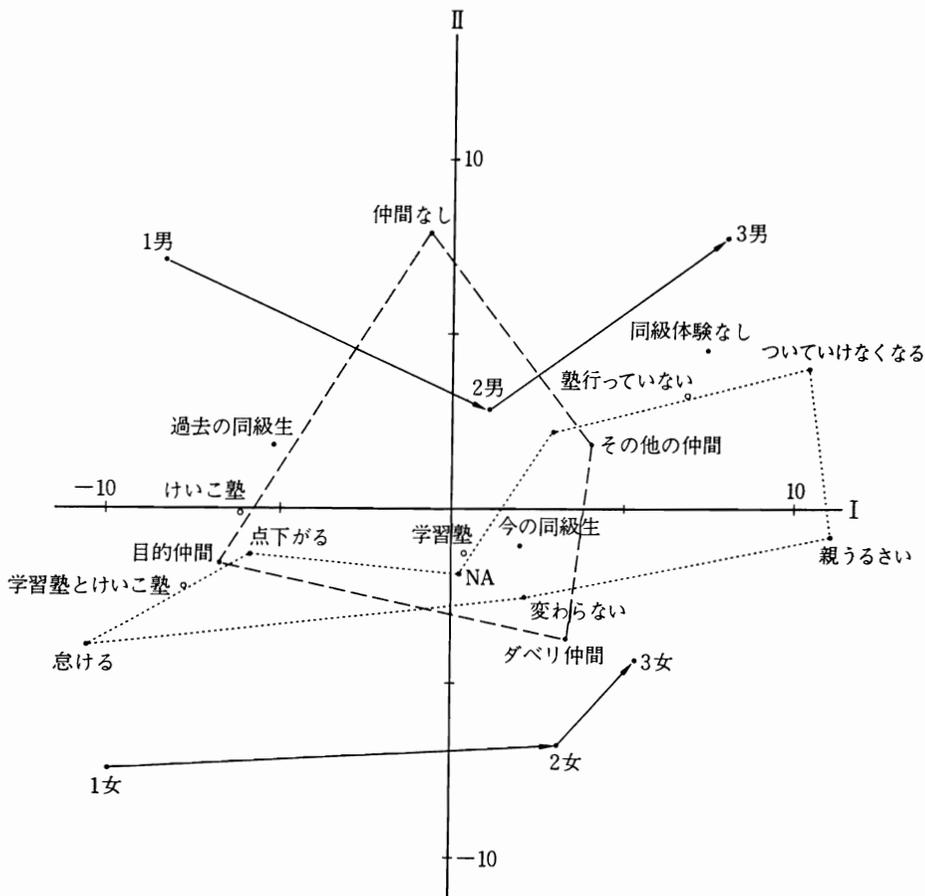


図17 学校観と関連項目（属性など）

自分は頭がいいはずだという思いをもつ子に多い。

<公塾>型には1年男子、一番の親友は過去のクラスメート、その親友とはじつに「まじめ」なつきあいをしており、自己像にしても、規律を守る親孝行で先生のうけもいい、勉強を志願する、みあげた優等生タイプの子どもである。

<学園>型は、1年女子、勉強は中ぐらいで、けいこ塾通いも熱心、学習塾を利用しているのは怠け心をコントロールするため。だからがまんとか努力という言葉にひかれるし、特技も持っている。わがままではなく、自分を見失うこともない。一番の友だちには、類型名から想像されるとおり、クラブや塾の同じ者が選ばれ、遊びだけの親友というよりいわゆる「仲良し」がいる子どもである。

<たまり場>型の子どもたちは、2、3年の女子に多く、タベリ仲間をもち、スターやタレントへの興味も強い。クラスではけっこう目立つ存在だが、規則遵守の心は強くなく、科目の好き嫌いもある、文字通りのたまり場人間である。親友との交際は活発で、少々ヤバイことをしたり、異性、先生や学校の不満を言ったり、お金の貸し借りも多い。

従来、中学生や高校生の行動や意識に関する調査研究で、このように学校観を直接引き出した

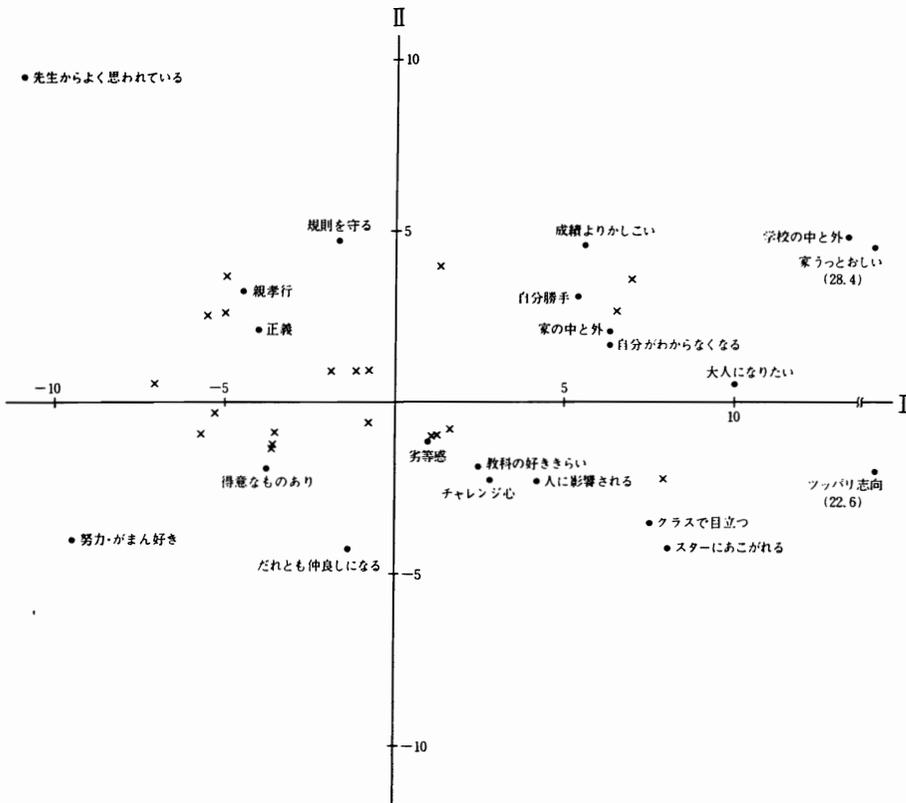


図18 学校観と関連項目（セルフ・イメージ）

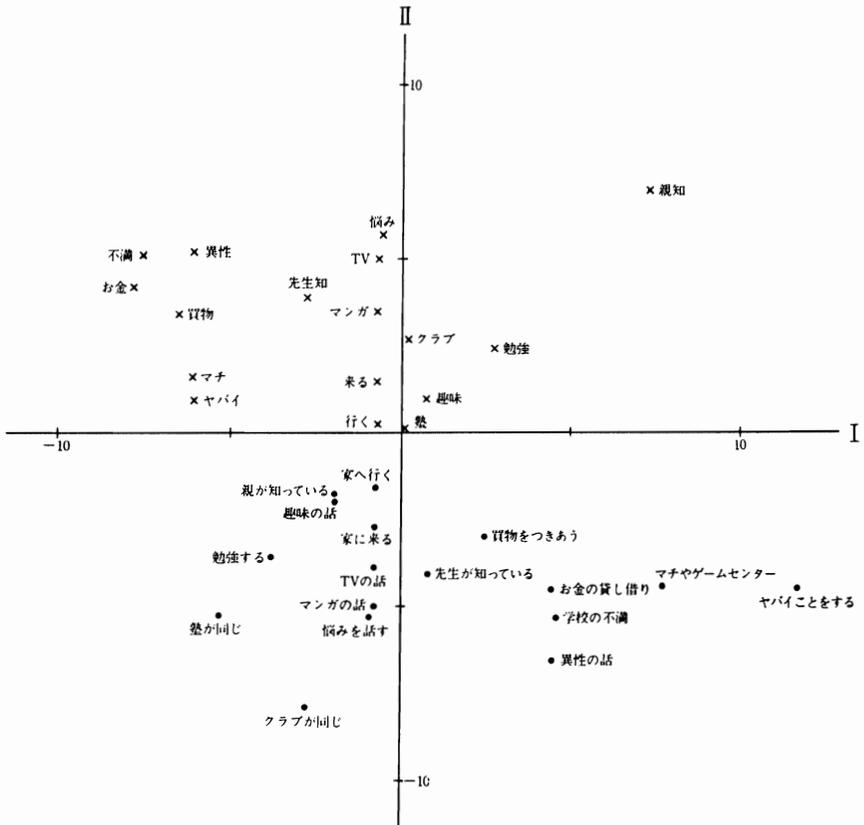


図19 学校観と関連項目（一番の親友）

ものはほとんどなかった。中学校とは何か、中学生とは何か、を問う以上、当の子どもが学校をどうイメージし、どうコミットしているかを知ることは、不可欠の視点である。その意味で、われわれが提示したこの4類型はきわめて重要な知見であると自認したい。それは次の諸点においても明らかだと思われる。

第1は、「勉強ぎらいの学校好き」と言われるような中学生のかなり平均的イメージについて、ここでは第II軸のマイナス方向に出てくる、学校＝学園、たまり場という分離を可能にする点である。つまり学校好きの、喜んで学校へ通う子どもにも、2つのタイプがあって、学校内制度にコミットする群と、それとは切れた友だち関係に一種の救いを求めて通学ルーティンを受容している群が分類される。後者は見方をかえれば、脱学校の学校観でもあるといえよう。中学校に通う子どもたちにとって、学校の「定義」の差は、大人流の平板な見方を越えた所を指し示していると思われる。

第2は、最近の「荒れる中学校」といった現象についての理解を深める契機が、この類型論には含まれている点である。図17をみれば明らかのように、学年性別の平均スコアのプロットか

ら、男子は〈公塾〉→〈収容所〉、女子は〈学園〉→〈たまり場〉へとイメージ変容が生じる可能性が示唆されている。もちろん、時系列分析ではないので速断はできないが、中学生の学校観が学年に応じて、図で言うと右へシフトし、学校という制度とその顕在的機能を受容する契機が著しく稀薄になっていく点が重要である。

このような移行が、後に述べるような「生徒化」の帰結であるとするなら、強制連行された子どもの「校内暴力」と、それをとりまく一群の〈遊び発見〉型の潜在的支持層、および学校コミュニティから「外出」した時点の遊び型非行、女子非行と第4のタイプの〈たまり場〉視する子どもたち、といった図柄を予想することも可能である。そしてこの一群にとって、校則強化＝管理教育がテコになって、群れることへのチェックが厳しくなれば、彼らの学校観が〈強制収容所〉イメージにシフトする可能性も十分予見できるのではないだろうか。

第3は、Ⅱ軸のわれわれが共同体志向と名づけたものの意味である。文字通り学校は、義務教育機関であり、しかも、イリッチの言葉を借りれば「履習を義務づけられたカリキュラムへのフルタイムの出席を要求する」⁸⁾ ゲゼルシャフト的集団である。しかし、学校という集団を既存の集団タイプのどれか1つにあてはめるだけで、その特徴が明らかになるわけではない。つまり、集団主義教育論を引き合いに出すまでもなく、近代学校においても集団生活による子どもの社会性の発達が目標視されていたはずであり、その点から、学校（学級）を擬似的第一次集団（quasi-primary group）と呼ぶ議論も、それなりに説得力があったのである。

しかし周知のごとく、現代学校が上級学校への受験を目的とした戦士教育機関として機能し、選別機関化するにつれ、そうした側面は背後に退けられてきた。ある点では、学校のたてまえとする社会化機能が集団論としての学校論には予定されつつも、それが選別機能と奇妙に屈折した併存をもたらしているのが、現在の学校論の構図であるといってもよいのかもしれない。

こうした「科学的」認識とは別に、われわれの分析結果は、中学生が抱く学校観には学校をゲマインシャフト的な仲良しがいる集団として「定義」しているかいないか、自らがそこにコミットしているという参与意識が強いか弱い、の問題に気づかせてくれる。これは昨今の、HRや生徒会活動の動向、また文化祭や体育祭などの学校行事への消極的・つきあいのかわり傾向の増大とも大きく関連しているように思われる。

子どもたちが学校を「共育」共同体として構想参与するには、現代の学校はあまりにもその要件を欠いている。そうした中であって、中学生は、せいぜい友だちとのサークルか、勉強を二の次にしたたまり場として、学校生活の「共同性」を体験することしかできない。そうでない者は、勉強道場ないしは強制収容所の中で「孤立化」を甘んじなければならないのである。こうした事情をこの類型論は照射している。

以上の考察を通じて、現代の中学校が当の中学生からいかに多様なイメージを与えられているか、いわば複数の学校＝舞台観がどのような問題と関連して構成されているか、をうかがうこと

8) I・イリッチ、前掲書、p. 59.

ができた。学校観の諸相は、単なる類型論の域を出て、学校の存立構造を解く重要な視座を包含しているように思われる。

IV 「生徒化」過程とその構造

1. 子どもの「生徒化」

いまの中学生が自分をどういう人間だとイメージし、いかなる友を選びどういう行動をしているか、さらに彼らにとって学校生活が何であり、そこにどうコミットしているのか、の3点を中心に調査の分析結果を考察してきた。われわれの問題意識は「いま子どもにとって中学校とは何であるか」を明らかにすることにあるので、これまでの知見をもとにしながら、このテーマにアプローチしてみたい。

子どもは、学校という制度に封じ込められ (institutional containment)⁹⁾、〈おまえは学ばなければならない存在である〉¹⁰⁾という期待圧力をかけられている。社会——P・アリエスの所論¹¹⁾をふまえるなら近現代社会は、こうした固有の期待圧力を人間の「発達段階」プログラムにのせて、学年制・学校制度を大人たちにとってゆるぎない「自明性」の世界として定立しているといえよう。

子どもが「無限の可能性」であるとすれば、それは大人にとって把握不能である。そこで、前面に押し出されたのが「発達」であった。子どもを「発達」でとらえるために、一応の道すじや段階が必要となる。ゆえに大人に到る道すじが焦点化され、子どもはその途上にある者として輪郭を与えられる。道をつけるためには、現行の秩序体系に基づく分節化が適用された。こうして「発達」は、「秩序への適応」とほぼ同義となり、「無限の可能性」は密かに有限化されて、子どもは、たいへんわかりやすい存在となった。大人との距離、すなわち、秩序を到達点とする道すじの、どの段階にいて、どれだけの適応能力を獲得しているかが、指標となるからである¹²⁾。

このような形で、「専業学び人」として「発達」的に定義される子どもは、特定の学校の特定の学年に位置づけられた「生徒」となる。本来的には「生」から「死」への旅人である人間の間断なき過程の一部が、段階として切りとられるばかりでなく、「有限化」された制度的属性が付与される。つまりここには、1つの社会的属性でしかありえない「生徒」が、孫であり親の子であり誰々の友であるような1人の「子ども」の、全存在の定義に転倒してしまう契機がある。いわば「発達の署名」¹³⁾として、○学校○年生であることが自明視されるわけである。

9) Berger, P. & Berger, B., *Sociology: A Biographical Approach*, Penguin Books, 1976, p. 242.

10) E・エリクソン, 小此木啓吾訳編『自我同一性』(誠信書房, 1973) p. 101での表現(後出)をもとにしている。

11) P・アリエス, 杉山光信他訳『<子供>の誕生』(みすず書房, 1980) 参照。

12) 本田和子『異文化としての子ども』(紀伊国屋書店, 1982) p. 17.

「大人」対「子ども」という軸が、心理・社会的未熟—成熟という、曖昧ながらも一応一般的に容認されている区切り基準だとしたら、学校は、子どもをさらに段階的「生徒」と再定義し、「生徒」役割を制度的に付与する機能を基本的に果している。しかも森毅の言うように、「義務教育幻想」が「みんなが同じに育たねばならないという呪縛」¹⁴⁾だとするなら、本論の対象とする中学生の存在を明らかにするためには、子どもの「生徒化」こそが、学校論の中心にすえられるべきである。

以上の前提に立って「生徒化」概念を要言すると、特定年令層の子どもたちを「一人前の生徒」にしようとする、社会の発達期待プログラムに即応した学校過程である、といえよう。ここで「一人前」とは、＜わたしは学ばなければならない存在である＞ことを充分内面化し、未熟—成熟スケールの一定の段階に相応した態度と行動がとれることを意味している¹⁵⁾。

ところで「中学校」段階に位置づけられた子どもは、こうした「生徒化」圧力に対して一部には懐疑と反発を表出しながらも、すすんでか不承不承かは別にして、その「生徒役割」期待を内面化し、＜一人前の生徒＞になろうとしている。われわれのデータにおいても、前述のセルフイメージにおける従順的傾向や、「落ちこぼれ観」における「本人の努力しだい」が他の選択肢を圧倒し、55%を占めていること、学習塾や家庭教師の効用として「遊び時間が増えて、なまけぐせがついてしまう」といった怠学ブレーキが第1位にくることが、それを端的に表わしている。

このように考えると、今の中学生にとって「学ぶことが喜びになる」という事態よりも、勉強＝怠学コントロール＝努力と忍耐を価値理想とした、義務教育による社会化が基本的には受容されるような学校生活を送っているとみてよい。

日本の「立身出世主義」を西洋のプロテスタンティズムに相同するものと説き、そこで「心構え」主義、「禁欲」主義を折出したのは見田宗介¹⁶⁾である。この禁欲主義が、秩序維持イデオロギーの下位意識として、体制内化を促進する現状への埋没と自罰主義を増殖していった事情は、現在の日本の教育制度においてますます純化されている感が強い。「落ちこぼれ」たのは、自分の「努力」が足りなかったからだ……。

前述の本田の「発達」と「秩序への適応」を「生徒化」は体現している。「発達努力」と「適応努力」、それへの忍耐を賞揚する制度として学校が機能しているのは、たしかに現代学校特有の現象ではない。しかし、そうだとすると、当該の中学校論にとって第一義の意味をもつことに

13) この語は、J・マナー、P・タッカー、朝山新一他訳「性の署名—問い直される男と女の意味」(人文書院、1979)のアナロジー。

14) 森毅「『義務教育』幻想よ、さよなら」、『ひと』(1982・6月号) p. 13.

15) 柴野昌山は、「学校集団において、青少年が知識の配分と統制を高して差異的に文化的価値を内面化し将来の地位配分を見越した成員性の形成と役割取得の能力を獲得する過程」を＜学校社会化＞と規定している(前掲書、p.168)。これと＜生徒化＞とはきわめて類似している。しかし、学校制度とからませた人間存在論的視点、「中学生らしさ」圧力にみられるような「生徒役割」への注目、といったわれわれの含意は、この用語ではそれほど鮮明に出しえないと思われる。

16) 見田宗介「現代日本の心情と論理」(筑摩書房、1971) p. 185—215.

変わりはない。むしろ、こうした「生徒化」の力学を通して、現代学校の置かれている「磁場」の構造を解明していくことが必要だと思われる。そこで、われわれのデータを別の角度から分析してみることにしよう。

2. 「怠学」規制と「生徒化」

学校観の分析に用いた90アイテム・カテゴリーに、セルフイメージのうち学校関連項目とみられる5変数10カテゴリー、学年性を組みあわせた6カテゴリーを加え、さらに2肢選択の登校気分、理想の教師像のマイナス反応分18カテゴリーをあわせた、124アイテム・カテゴリーを説明変数とし、外的基準にセルフイメージ項目の「『努力』とか『がまん』という言葉が好きだ」の「思う」「思わない（どちらともいえない）」を選び、数量化Ⅱ類による分析を試みた。

相関比 (r^2) は 0.189 で、あまり十分な判別に成功しているわけではないが、怠学コントロールの指標としての努力価値の内面化の程度と、それと関わりをもつ学校生活項目の内容をみるには、それなりの有効性をもっていると思われる。図20はこの2集団の判別結果を度数分布（パーセント表示）図にしたものである。これによると努力群と非努力群はおよそ71%の確率で判別で

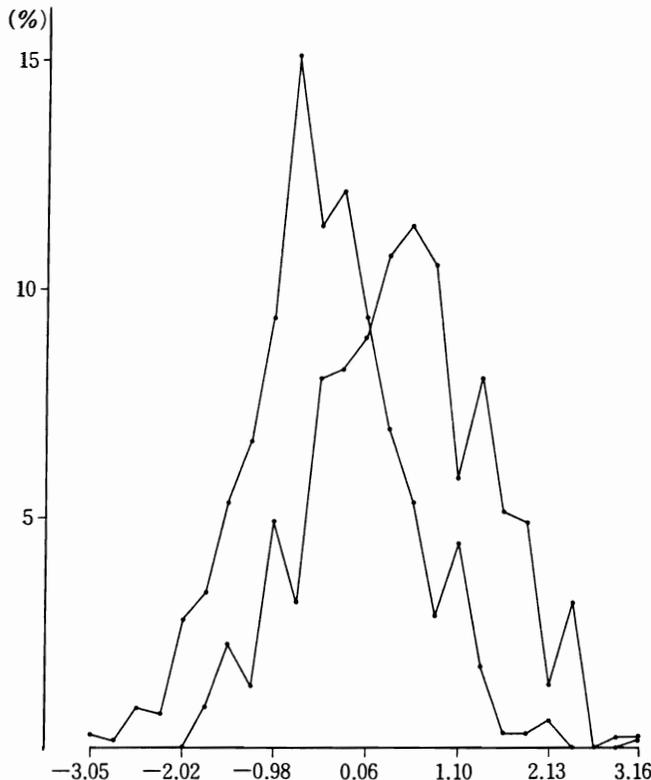


図20 グループ別度数分布図（努力志向）

表8 努力志向の規定要因

変数	アイテム・カテゴリー	カテゴリー得点 ・レンジ順位	偏相関係数・順位
登校気分・きょうも1日ががんばろう	31 はい ※ いいえ	1.296 -0.203 ①	0.20186 ①
HR・生徒会活動	69 熱心 70 どちらともいえない・NA 71 熱心でない	0.625 -0.019 ④ -0.280	0.13004 ②
「金八・熱中先生」観	53 知らない・NA 54 きらいだ・つくり話だ 55 身近にいてほしい 56 理想的だ	-0.314 -0.476 0.246 -0.145 ⑤	0.12086 ③
自分の「落ちこぼれ」度	20 「落ちこぼれ」だと思う 21 「落ちこぼれ」かかっている 22 ゆだんをすると危い・NA 23 まあ、その心配はないだろう 24 まったくその心配はない	-0.486 -0.287 0.031 ② 0.214 0.406	0.10196 ④
登校気分・友だちに早く会いたい	25 はい ※ いいえ	0.344 -0.211 ⑨	0.09793 ⑤
「落ちこぼれ」観	13 本人の努力 14 先生の指導 15 しかたない 16 だれだってその危険あり 17 親の放任 18 学校制度 19 その他・NA	0.119 -0.149 -0.450 -0.162 ③ 0.383 -0.191 -0.104	0.09475 ⑥
登校気分・きょうはいいことあるかな	28 はい ※ いいえ	0.284 -0.193 ⑬	0.08450 ⑦
学年・性	※ 1年男子 1年女子 2年男子 2年女子 3年男子 3年女子	-0.167 0.305 -0.024 -0.159 ⑮ 0.142 -0.082	0.07893 ⑧
登校気分・△△の授業が楽しみだ	27 はい ※ いいえ	0.538 -0.063 ⑦	0.07686 ⑨
教師の「体罰」	57 ぜったいいけない 58 生徒への教育的配慮 59 良し悪しをはっきりするのに必要・NA 60 先生だってなぐりたい 61 たるんでいるから必要	-0.235 -0.071 0.117 ⑥ 0.375 0.013	0.07423 ⑩

きる。(選択肢における「どちらともいえない」をはずせば判別精度はもっと上がると思われるが、ここでは全サンプルを2分する方法をとっている。)

表8は44変数のうち偏相関係数の高いものから順に10アイテムをとり、それに各カテゴリー別得点を併記したものである。カテゴリー得点のレンジの順位もほぼ上位にきている。

これをみると、努力・がまん志向は「登校気分」のうち向学校項目と大きく関連していることがわかる。個々には「登校気分・きょうも1日ががんばろう」「HR, 生徒会活動・熱心」「金八, 熱中先生観・身近にいてほしい」「落ちこぼれ度・まったく心配はない」「登校気分・はやく友だちに会いたい」「落ちこぼれ観・親の放任が問題」「登校気分・きょうは何かいいことあるかな」「1年女子」「登校気分・△△の授業が楽しみだ」「体罰・先生だってなぐりたい時もある」が、カテゴリー得点のプラスに大きいものである。

明らかに、努力・がまんという一種の徳目に親和性をもつ子どもは、学校生活に対してひじょうに積極的なコミットをしようとしており、学校での自己の成績や活動に対して高い評価を与えているグループである。反対に、学校生活に対して消極的にしかコミットしない群が、非努力志向の子どもたちということになる。

じつは、学校観の類型化において析出された第I軸が、〈勤勉・順校—怠学・反校〉と二重に命名されなければならなかったのも、このことに基づいている。つまり、向学校志向の強い子ほど、努力や忍耐、怠学コントロールが十分に内面化できており、反学校志向の子は怠学ブレーキが十分にビルト・インされていない子と重なりあっていたのである。

ここで注意しなければならないのは、われわれの考察からすれば、「向学校」は「順(学)校」と言いなおすのが妥当である、という点である。向学校を、学校へ行くことがプラスに動機づけられているととらえれば、そこには「勉強ぎらいの学校好き」にみられるような、また、既述の遊び発見＝つまり場イメージで学校の集団機能と親和する子どもたちも、向学校群にとうぜん入るべきであろう。ところが彼らは、「順校」という点では向学校グループではないのである。

これらの点をふまえて、「生徒化」論の文脈で問題を整理すると、次のようになる。

まず「生徒化」過程には2つの回路がある。怠学コントロール→努力主義→高い報酬配分→順学校志向→怠学コントロールの強化、という回路と、低い報酬配分→反学校志向→怠学コントロールの弱化→反努力主義→より低い報酬配分、と連鎖する回路の2つである。前者がプラスの回路だとすれば、後者はマイナスの回路である。

「よい生徒であれ！」という「生徒化」圧力は、マイナス回路を逆モデルとして生徒の前につきつけ、この回路に落ちこまないように規制する作用をもつと同時に、マイナス回路にすべり落ちた子どもに対しては、もっと努力しろ、そうすればプラス回路に復帰できるぞ、と努力主義＝反怠学を奨励する作用を有している。

このようにみると、「生徒化」過程は、努力主義賞揚をテコに学校内の高い報酬獲得を目標とした、怠学コントロールという1つの社会統制の意味をもっていることがわかる。再び見田宗介

にしたがえば、アスピラントの報酬追求意欲を活性化させつつ、順校コントロールによる学校内秩序の維持形成をおこなう、という両面追究型の機能をそれはもつことになる。怠学コントロールが「生徒化」過程の根幹にあることは、まちがいないところである。

ところが、現実にはこの生徒化過程は大きな問題をはらんでいる。それは、「一人前の生徒」をめぐる問題である。

学校の「生徒化」は、当該の発達段階にみあった「一人前像」を原理的にもっていなければならないと同時に、他方では、次なる発達段階への移行という課題にも拘束されている。「中学生だから映画へ行く時は保護者同伴でなければならない」「中学生だからパーマをあててはならない」「中学生だから……」といった圧力は、前者にかかっている。それに対して、「いい高校に入れないと困るから今のうちにうんと勉強しなさい」「そんなことをしていると後で泣くぞ」といった圧力が、後者に属する。

現在の受験体制はもっぱら後者、つまり「上級学校生徒への予期的社会化」の意味をもった、とりあえず上位の発達段階を目標視する形の生徒化によって、大量の「素直な受験戦士たち」を創出している。しかし、160万人のうちおよそ10万人を占める高校非進学者たちにとって、このような生徒化は、どのような意味をもつのだろうか。中学校が子どもの「受験生化」機関としてのみ機能するなら、ヴォランティアな中卒後出社会の意思をもった者や、進学を断念するようしむけられた報酬配分の少ない者にとって、中学校はいかなる制度でありうるのか。

おそらく、その場合子どもたちに加えられるのは、発達の道すじからみると「傍系」の「招かれざる客」か、その道すじから「落ちこぼれ」た「落伍兵」のラベルリングであろう。結局、彼らは「一人前の生徒」という範疇には入れてもらえないことになる。では彼らにおける「生徒化」過程とは何か。それは、前者の「中学生だから」の圧力、すなわち未熟―成熟スケールの「未熟度」に目盛りを合わせた時の「中学生らしさ」への社会化、「未熟者への社会化」の過程である。これが彼ら用の「一人前の生徒」の中身となる。

「生徒化」過程が、このように、当該年齢の子どもたちを「素直な受験戦士」と「傍系・負系の未熟者」に分解していく時、「一人前の生徒」理念は破綻する。中学1年時では「一人前の生徒」に自己同一化しようとしていた子どもが、学年が進むにつれこの分解過程にさらされ、しだいに自らをイジけた反学校怠学者と規定する者が増える傾向にあるのは、まさに現在の中学校における「生徒化」の帰結そのものであるといわなければならない。さらに、「傍系・負系の未熟者」を制度的に封じ込めるものが学校であるなら、そこでの「校則強化」がいかなる意味をもつかは、もはや言うに及ばぬほど歴然としている。義務教育にとって強制収容のイメージはつねにつきまとうものである以上、「生徒化」の内容がどのようなものであるかが、子どもたちを学校生活に親和させるかいなかを決めているのである。

3. 「ツッパリ」志向の論理

反学校的な生徒文化の1つの象徴語に、ツッパリという言葉がある。つぎにこの問題をわれわれの「生徒化」論の文脈で考察してみたい。前と同様の44変数124マイテムカテゴリーを説明変数とし、セルフイメージ項目の「自分はツッパってみたいと思うことがよくある」かの肯定否定を外的基準にした、Ⅱ類の解析結果を参考にアプローチしてみよう。

相関比は前よりやや上がり(0.231)、それなりに有意な関連が見い出せると思われる。図21に示した判別効果は72%である。

なお、本調査では「ツッパリ」という言葉の意味そのものについては問うていない。調査対象となった子どもたちが、個々に付与した意味に基づいてセルフ・イメージの1項目として答えているにとどまっている。したがって、濾過された「ツッパリ観」によって子どもの自己像を解釈するというのではなく、ここでは逆に、ツッパリ志向性の中身を把握する糸口として、この分析結果を位置づけることをねらっている。

さて、結果は、表9に示されているとおり、「ヘアスタイル、パーマの制限・ない方がよい」「クラスの中でわりと目立つ存在だと思う」「落ちこぼれ観・親の放任」「教師への暴力・がまんできない時はやむをえない」「金八、熱中先生・身近にいてほしい」「学校の中と外では態度や行動が違っている」「落ちこぼれだと思う」「体罰・最近の生徒はたるんでいるから必要だ」「義務教育でなくなったら、不安だから学校へ行く」「2年男子」が上がってくる。

青年期前期のいわゆる「思春期」特有の自己顕示傾向があるにはちがいないが、学校生活項目に表われるツッパリ志向群のプロフィールはひじょうに興味深い。「金八先生のような先生が身近にいてほしい」「落ちこぼれは親の責任」は、さきほどの「努力やがまん好き」でプラス反応だったが、こちらでも同じく正反応している点、さらに「不安だから学校に行く」「体罰はたるんでいるから必要」といったカテゴリーが、ツッパリ群と関連しているのは注意すべき点である。中学生が「ツッパリたい」と思うのは、それをすぐに非行と結びつけたがる大人の解釈とは異なって、きわめて情緒的な不安定さと結びついているとともに、親や教師によって満たされない何らかの権威への憧憬と甘えを含み込んだ、自立への躊躇、不安を象徴している。

その意味で、このツッパリ志向が、図18にあるように「遊び発見＝たまり場」イメージで学校をとらえる子どもに顕著にみられることが想起されなくてはならない。そして、大人流の「ツッパリ」＝非行(の予兆)という図式は、友なり教室を舞台にしたツッパリ演技を可能にする条件がなくなって、孤立した反学校的ツッパリに転化した時を先どりしたラベリングであることがわかる。

山村賢明は、子どもの「地位分化」を論じる中で、受験およびクラブ活動の両面にわたる報酬配分におけるメリトクラシー原理の貫徹と、管理主義的な生徒指導体制の、「八方ふさがりの閉塞状況」を指摘し、その状況に拘束された者として「落ちこぼれ」を解釈している¹⁷⁾。これはわ

表9 ツッパリ志向の規定要因

変数	アイテム・カテゴリー	カテゴリー得点 ・レンジ順位	偏相関係数・順位
ヘアスタイル・パーマの制限	83 決まっている方がよい	-0.232	④ 0.15334 ①
	84 ない方がよい	0.488	
「クラスの中で目立つ」	※ 思う 思わない・どちらともいえない・NA	0.568 -0.147	⑤ 0.14810 ②
「落ちこぼれ」観	13 本人の努力	-0.126	0.12557 ③
	14 先生の指導	0.128	
	15 しかたない	-0.058	
	16 だれだってその危険あり	0.167 ①	
	17 親の放任	0.646	
	18 学校制度	-0.280	
	19 その他・NA	0.545	
教師への「暴力」	62 そう考えることもすることもいけない	-0.263	0.11815 ④
	63 そういう気になってもしてはいけない	-0.117	
	64 がまんできない時はやむをえない	0.492	
	65 答えたくない・NA	0.095	
「金八・熱中先生」観	53 知らない・NA	-0.202	0.11391 ⑤
	54 きらいだ・つくり話だ	-0.328	
	55 身近にいてほしい	0.213	
	56 理想的だ	-0.185	
「学校の中と外で態度がちがう」	※ 思う 思わない・どちらともいえない・NA	0.368 -0.100	⑨ 0.09857 ⑥
自分の「落ちこぼれ」度	20 「落ちこぼれ」だと思う	0.355	0.09768 ⑦
	21 「落ちこぼれ」かかっている	0.201	
	22 ゆだんをすると危い・NA	0.026 ⑥	
	23 まあ、その心配はないだろう	-0.294	
	24 まったくその心配はない	-0.129	
教師の「体罰」	57 ぜったいいけない	-0.028	0.09506 ⑧
	58 生徒への教育的配慮	-0.140	
	59 良し悪しをはっきりするのに必要・NA	-0.002 ②	
	60 先生だってなぐりたい	0.052	
	61 たるんでいるから必要	0.638	
「義務教育でなくなったら」	36 学校へは行かず働く	-0.137	0.08547 ⑨
	37 学校以外で勉強を続ける	-0.206	
	38 趣味やスポーツの教室に通う	-0.142	
	39 どこにも所属せずブラブラ・NA	-0.068 ⑧	
	40 不安だから学校へ行く	0.315	
	41 友だちと遊べるから学校へ行く	0.090	
	42 勉強のために学校へ行く	0.129	
学年・性	※ 1年男子	-0.239	⑩ 0.08502 ⑩
	1年女子	-0.071	
	2年男子	0.222	
	2年女子	0.182	
	3年男子	-0.074	
	3年女子	-0.055	

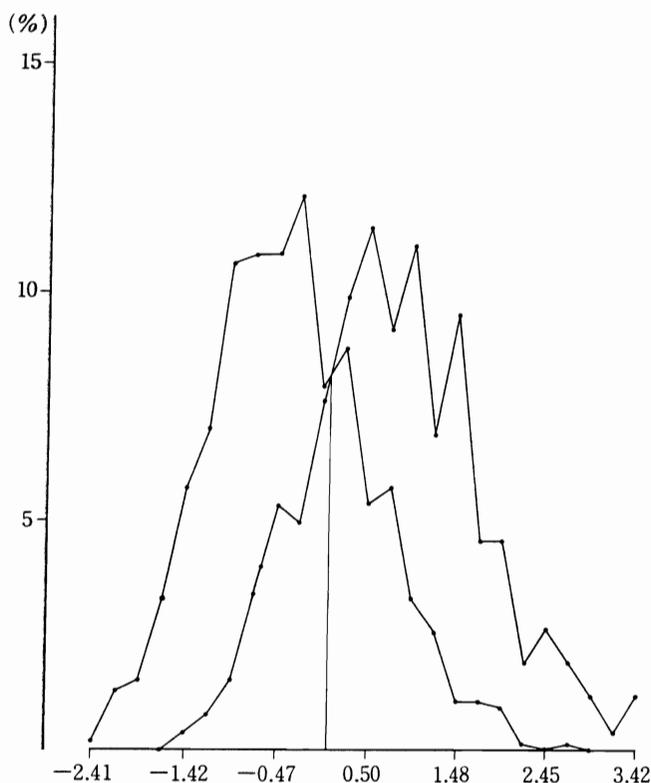


図21 グループ別度数分布図 (ツッパリ志向)

れわれの学校観類型と2つの判別分析による結果と、見事に一致するものである。しかし、「落ちこぼれ」と「反学校的ツッパリ」を直結することは早急にすぎる。両者が結びつくには、何らかの媒介構造がなくてはならないからである。

ここでは、2つの論点を「生徒化」過程と関連づけて提示したい。1つは2章の友人論、3章の共同体志向でも論じた、仲間集団の問題であり、もう1つは、反学校的行為にみられる「他罰」過程の問題である。

「落ちこぼれ」と反学校的「ツッパリ」が結びつくためには、その前提に仲間集団、仲間関係の脆弱性という条件が考えられる。

たしかに、学校によって子供たちは家を離れ、新しい友だちに出会う機会が与えられる。しかし、それと同時にこの過程を通して、子供たちは一緒にされた同年齢者の中から友だちを選ぶべきだという観念を教えこまれる。これに対し、若者に、彼がまだ幼い頃から他の人に会い、その人を評価し、あるいはまた他の人を捜し出すなどの魅力を感じさせるならば、彼らに新しいことをするために新しい相手を見つけるということへの関心を一生涯、持ち続け

17) 山村賢明「学校文化と子どもの地位分化」、浜田陽太郎編『子どもの社会心理・II』(金子書房, 1982) p. 131-41.

させる準備となろう¹⁸⁾。

このイリッチの文章は、十二分にわれわれの友人観にかんする自明性をくだいてくれる。今回の調査でも、すでに指摘したとおり、今一番の親友と呼べる友だちがあるのは全体の97%であり、現在ないし過去に同級体験をもっているのはその中の77%に達している。イリッチの指摘は、いうならば友人の学校化であるが、われわれの文脈からすればこうなる。子どもAとBは、学校化された場面では、「生徒化」された中学生A'と同じくB'の関係となる。そこでは関係単位が「生徒化」されているだけでなく、学校文化の中では関係そのものも「生徒化」されている。

現在、ガキ大将を探すことはむずかしいと言われる。これは「生徒化」過程と密接な関連があるように思われる。それでも、小学校時代が、「空想と生活とが仕事と遊びの儀式を通して未だ解きがたく連結し、自発性と学校をサボるような非同調性のための余地が未だ存在する時期¹⁹⁾」であるとしたら、中学校段階は、非自発性と同調性が支配する「生徒化」過程のまっただ中にあるからである。

2章で述べたように、今の中学生の仲間関係の特質にダベリ志向があがってくるのも、またそれに関連して集団内の結合関係がきわめて稀薄なもの、「生徒化」された関係の1つの必然的現象なのであろう。彼らは休み時間や放課後の学校内で仲間関係の擬似体験をしているにすぎない。そこではもちろん、様々な事が話題となっているだろうが、そのかぎりでは、学校が「たまり場」であり、極論すれば、ダベリあうことが「生徒化」空間の中での気晴らしとしての「遊び」となっているにすぎない。

こうした見方からすれば、友人なり仲間集団が十全に子どもたちの間で形成される条件はきわめてうすいのは、とうぜんである。しかし、にもかかわらず、「制度化」された子どもたちは、学校の集団化機能に依拠しながら、「勉強ぎらいの学校好き」意識をソフィストケートしている。この逆説の中で、現在の中学校は存在している。そして、このような土壌の中で、「落ちこぼれ」が「反学校化」する条件がつくられるのである。

第2に、上に述べた第一の条件に加えて、主観的な反学校化の契機を考えなくてはならない。

「落ちこぼれ」に対して、そうなったのは、少なからずおまえの怠学の結果だ、という「うしろめたさ」を感じさせるのが、学校の「生徒化」機能である以上、彼らに「自罰」的なセルフコントロールによる葛藤がないとは思われない。はじめから、「おまえは怠け者」だというレッテルを受容することは、まずない。おそらく自らを「怠学者」と認ずるためには、自分を怠け者にしたのは何々である、という理屈がなくてはならない。

典型的に言えば、自分を「逸脱」的な行動へと走らせるためには、生徒化による「自罰」意識を代償もしくは消去する「他罰」の契機がなければならないのである。「落ちこぼれ」から「落ちこぼし」への転換である。そうした他罰の対象として、学校の構成員や建築物そのものが浮か

18) I・イリッチ、前掲訳書、p. 168.

19) K・ケニストン、高田昭彦他訳『青年の異議申し立て』（東京創元社、1977）p. 49.

び上がってくる時、「校内暴力」が現象するのではないか。生徒間のいじめ—いじめられ行動も、別の心理過程が介在してはいるものの、このプロセスと無縁では決まてないと思われる。また、マチからガッコウへと校内化している点も、おそらく他罰の対象としての「学校なるもの」を考えなくてはなるまい。

他罰の象徴としての学校、これはどんな事柄でもいいというわけではない。教師のえこひいきと裏返しにある「無視」や「差別」、ラベリングに基づく一方的「指導」、生徒の生活世界の扉を開けようとしめないサラーマン的教師……これら現代学校の病理とみなされる徴候と、彼らの反学校化はかならず結びついている。だからこそ「ツッパリの卒業」²⁰⁾が美談を超えて「成功談」にもなる。

自罰と他罰、怠けと甘えの錯綜した心的過程と、「生徒化」過程とを関連づけることなしには、「子どもたちの反乱」「荒れる中学校」を理解することができないことは、確かである。

最後に、このような「生徒化」の矛盾はどのように解決すべきか、について試論を提示しておきたい。

もっとも肝要なのは、＜私は学ぶべき存在である＞(I am what I learn) という意味をどうとらえるか、である。学ぶということが何を意味するかが把握されないうまま、怠「学」コントロールが機能することは、本来的に官僚制と同質の管理主義である。「生涯教育」を訂正した「生涯学習」なる語が理念上容認されようとも、エリクソンの段階論を超えて「学」を人間的生と結びつける思想が真に構築されぬかぎり、空念仏に終わってしまうだろう。そうではなくて、「学ぶということ」が「遊」や「働」をとりこんだ地平に位置づけられたうえで、学校が怠学コントロールを十全に行なうことができるようなコンセンサスが社会的に形成される必要がある。その時学校は、はじめて固有の権威に支えられた、エチオーニの言う「規範的・道徳的」組織として再構成される可能性が生まれるであろう。

このことは、「落ちこぼれ」、非進学生徒、不本意就学者といった一群ばかりでなく、「優等生」についても重大な意味をもつ。岩田龍子の説く「能力証明」「能力アイデンティティ確立」²¹⁾のために、受験競争に駆り立てられ、「学」の目的をカッコに入れることを余儀なくされている「優等生徒」モデルに、自己を同一化させるといった「生徒化」の悲劇は、勉強ではなく「学」そのものを再検討しないかぎり、揚棄できまい。

ちなみに、「学習社会」論なるものもこの視点を欠落させると、＜おまえは一生学び続けなければならない存在である＞という命題が、即あらゆる人間の生涯を「生徒化」することに等しくなりかねない。場合によっては、学習社会はもっとも高度に管理された、文字通りの学校化社会となるかもしれない。

「学校化」社会の内実に「生徒化」があるとするわれわれの立場からすると、脱学校社会を構

20) 柴田勉春『「ツッパリ」の卒業』(時事通信社、1981)の書名による。

21) 岩田龍子『学歴主義の発展構造』(日本評論社、1981) p. 90-1.

想するには、「脱生徒化」問題を抜いて考えることはできない。もちろん本稿で取りあげた課題はほんの一部でしかなく、マスコミ、イデオロギー、教育行財政、それに経済、文化など、各次元各層の連関構造とその変動要因に関する全体的な考察が、この問題にアプローチするためには必要である。とはいえ、「生徒化」された子どもの置かれている状況についての以上の素描は、脱生徒化の方向性と指針をかなり明確に指し示しているように思われる。

いずれにせよ、山村の言う「学校大人文化」と「学校仲間文化」²²⁾が、真の意味で対話（two logos）できるような場としての「共育共同体」の実現は、いかにして可能になるか。いま学校論に課せられた問題はあまりにも大きい。

（序・Ⅲ・Ⅳ—岩見，Ⅰ・Ⅱ—富田）

22) 山村賢明，前掲論文，p. 107.